## 王七招飲、余遊紫藤塢、値雪失期

王七招飲す、余、紫藤塢に遊び、雪に値うて期を失す

孤舟山水雪晴時。　孤舟、山水雪晴るるの時、
看到梅花一萬枝。　看て到る、梅花一萬枝。
東崦題詩西崦醉。　東崦に詩を題し、西崦に醉ふ、
等閒忘却故人期。　等閒、忘却す故人の期。

【語義】王七の名字は不詳。紫藤塢は、前卷に其地に宿した五絶があつたが、その所在は不明。この詩は、王七といふものが招待したけれど、會ま紫藤塢に游び、おまけに雪に値つて、心ならずも、違約したから、作つたのである。

【詩意】ひとり、孤舟に乘じ、滿目の山水雪晴るる時に當りて、紫藤塢に至り、折から、今を盛りと咲き匂ふ多くの梅花を見た。かくて、清興湧くが如く、東崦に至りて詩を題し、西崦に至りて酒に醉ひ、等閒に故友の約束を忘れ、心ならずも、失敬したことに就いては、謹んで、御詫する次第である。

【字解】〔一〕東崦　崦は山。〔二〕等閒　なほざりと訓す。〔三〕故人期　期は約に同じ。

## 江上送客

江上、客を送る

春風江上蕩舟過。　春風江上、舟を蕩して過ぐ、
垂柳垂楊拂浪波。　垂柳垂楊、浪波を拂ふ。
惆悵今年頻送客。　惆悵、今年、頻りに客を送る、
長條欲折已無多。　長條折らむと欲するも、すでに多きなし。

【語義】説明に及ばぬ。

【詩意】舟を漕いで、春風吹き度る江上を過ぐれば、枝垂るる楊柳は、低く波浪を拂うて居る。ここに、惆悵の思に堪へざるは、今年打つづけて旅する人を送り、その都度、柳の枝を折つた爲に、今日では、長い枝を折らうとしても、いくらも殘つて居らぬといふことである。

【字解】〔一〕蕩舟　蕩は動かす、ゆすぶる、漕ぐ。

## 期諸友、看范園杏花、風雨不果

諸友と期し、范園の杏花を看むとし、風雨果さず

欲尋春去怕春休。　春を尋ねて去らむと欲し春の休むを怕る、
又値春陰不得游。　又春陰に値うて、游ぶを得ず。
寂寞西園風雨裏。　寂寞西園、風雨の裏、

【字解】〔一〕春休　春去る、春暮くる。〔二〕西園　卽ち范園。

杏花比客更多愁。杏花、客に比して更に愁多し。

【題義】范園は、前にも見えて居たが、蘇州城中に在つて、宋の范仲淹の遺蹟である。この詩は、諸友と范園の杏花を見に行かうと約束した處が、折惡しく、風雨に値うて中止したから作つたのである。

【詩意】春を尋ねて吟賞せむとし、春の去るを恐れて居る處が、生憎、空が曇つて、雨が降りさうで、游ぶことが出來なかつた。おもへば、寂寞たる范園、風雨の中に於て、杏花は、今しも散りかかり、游ぶことを果さざりし我等に比して、更に愁の多い樣をして居るであらう。

## 宮女圖

(一)女奴扶醉踏蒼苔。

明月西園侍宴廻。

小犬隔花空吠影。

夜深宮禁有誰來。

【題義】說明に及ばぬ。

【詩意】宮女は、この夕、月の光隈なき、西園に於ける御宴に侍し、やがて、歸らむとし、醉つた足元の危きを腰元に介抱されて、蒼苔を踏んで、しづしづと、おのが部屋の方に行く。もとより、宮禁の中は、しまりが嚴重で、深夜の候、怪しいものの來る筈もないのに、小犬は、花を隔てて、その宮女の影を見て、しきりに吠え立てて居る。

【餘論】青邱が後に罪を得て、死刑に處せられたのは、實の處、この詩に起因し、魏觀の事などは、ほんの表面上の口實に過ぎぬといふのが、むかしから、相傳へたことで、列朝詩集に「吳中野史に載す、季迪、この詩に因つて禍を得たりと。余、はじめ以て無稽となす。國初、昭示諸錄、載するところ李韓公子の姪諸小侯の爰書及び高帝の手詔、豫章侯の罪狀を觀るに及び、初めより、隱避の詞なし。すなはち知る、季迪の此詩、蓋し爲にするあつて作る。諷諭の詩、古今に妙絕すと雖も、しかも、此に因つて、高帝の怒に觸れ、手を魏守の獄に假る、亦た事理の有るところなり、論者、これを詳にせよ」とあつて、錢謙益は、卽ち此說を信じて居たのである。そこで、これを諷諭の詩とすると、明の太祖が色を好んだことを指斥したので、詩の意味は、宮女が宴に侍して回ると、天子は、人に知れぬ樣に、後をつけて跟いて來る、すると、小犬が其影を認めて吠え立てるといふことになつて、夜深宮禁有誰來、つまり、來る人の無い筈であるのに、ひよッこり來るのは天子であるといふことが言外に含まれて居ることに成る。しかし、金檀は「列朝詩集の注、吳中野史、季迪、この詩に因つて禍を得たるを載するに據り、因つて、昭示諸錄及び豫章の罪狀を引いて證となす、これ皆後に在るの事、以て牽引

【字解】【一】女奴　はしため、腰元。

し難し」といつて居る。次に、朱竹垞は「世傳ふ、侍郎、禍を買ふは、宮女の圖に題するに因る。その詩、云云。孝陵猜忌、情、或は之あらむ。然れども、集中、又畫犬に題するの詩あり、云ふ、

獨兒初長尾茸茸。行響金鈴細草中。莫下向瑤階一吠人影上。羊車半夜出二深宮一。

これは、すなはち、明初、掖庭の事に類せず、二詩、或は是れ庚申君を刺つて作る。好事者、これに因つて傅會するなり」といつて、必ずしも、これを信じない樣な口ぶりで、金檀も亦た「惟だ詩綜の注するところ、或は爲にするあつて作る」といつて、矢張、如上俗說を信せぬ樣である。最後に、趙甌北は「青邱の死、堯山堂外紀に據るに、謂ふ、その宮女の圖に題するあり、云ふ、小犬隔レ花空吠レ影、夜深宮禁有レ誰來、と。明祖、聞いて之を銜み、故に禍に及ぶ、と。李志光、作るところの傳には謂ふ、啓、事を謝して歸里す、適ま、魏觀、蘇を守りて甚だ啓を禮遇す、啓、已むを得ずして、その上客となり、連蹇以て死すと。すなはち、青邱、專ら魏觀に累せらるるに似たり。惟だ明史本傳に謂ふ、啓、かつて、詩を賦して諷刺するところあり、帝、これを嫌む、未だ發せざるに家に歸る、觀が改めて郡治を修し、啓、爲に上梁文を作るを以て、帝怒り、遂に市に腰斬すと。これ、青邱先づ詩を以て嫌を召いて、禍は觀の上梁文に發するなり。按ずるに、青邱、又畫犬に題するの一首あり、云ふ、莫下向瑤階一吠人影上、羊車半夜出二深宮一と。すなはち、止だ隔花吠影の句のみならず」とあつて、甌北は、すつかり、この俗說を信じて居る樣である。今、公平に之を判斷すると、明祖は猜忌甚しく、かういふ事は、隨分有り得べきであるが、青邱の詩に就いて嫌を含んで居たか如何かは、揣摩の臆說であつて、明祖を九原より起すに非ざれば、本當の事は分からぬといつて置くのが、一番、穩當であらうと思はれる。

## 逢張架閣

張架閣に逢ふ

花落江南酒市春、　花は落つ江南酒市の春、
逢君歸騎帶京塵。　君が歸騎、京塵を帶ぶるに逢ふ。
一杯相屬成知己。　一杯相屬して、知己と成る、
何必平生是故人。　何ぞ必ずしも平生是れ故人。

【語義】説明に及ばぬ。架閣は官名で、前に數ば見えて居た。

【詩意】酒に事かかぬ江南の驛市に於て、花落ち春盡きむとする頃、ゆくりなくも、君に逢つたが、君は、馬に乘つて、故郷に歸らむとし、衣上には、都の塵を帶びて居る。そこで一杯をさしつけて、忽ち知己と成つたが、何も必ずしも、舊交ある間柄でなくても宜しい。

【字解】【一】酒市　金檀注には成都古今記に「十月、酒市を爲す」とあるのを引いてあるが、適當でない。ここでは、酒に事缺かぬ驛市といふ義であらう。十月では、花落といひ、春といふに對して、矛盾する

## 山中春曉聽鳥聲

山中春曉、鳥聲を聽く

子規啼罷百舌鳴。　子規、啼き罷んで、百舌鳴く、
東窓臥聽無數聲。　東窓、臥して聽く無數の聲。
山空人靜響更切。　山は空しく、人靜かに、響更に切、
月落杏花天未明。　月は杏花に落ちて、天未だ明かならず。

【字解】〔一〕子規　ほととぎす、倉語に「江左には子規といひ、蜀右には杜宇といひ、甌越には怨鳥といふ、一名杜鵑」とある。〔二〕百舌　かけす、前に見ゆ、禮記に「仲夏の月、小暑至り、螳螂生じ、鵙、はじめて鳴き、反舌聲なし」とあつて、注に「反舌は百舌鳥」とある。

【語義】説明に及ばぬ。

【詩意】ほととぎすが啼き止むと、かけすが鳴き出し、東窓に臥して、聽いて居ると、數かぎりなき鳥の聲がする。山は空しく、人は靜かなる處に於て、この響は、一そう、はッきりして居るし、折から、月は杏花に落ちかかつて、まだ夜あけには程がある。

【餘論】この詩は、毎句故らに律句の體式を破つたので、結句は、略ぼ平仄が協つて居るが、それでも、特に注意して、第五字を平にしてある。かういふ詩は、七絶の變體と見ても善いが、一韻到底の七言四句の古詩とする方が穩當だといふのは、予が平生の持論である。



## 與親舊飲散、出抵城西客舍、賦寄

親舊と飲散じ、出でて城西の客舍に抵り、賦して寄す

吳王廢苑草青青。　吳王の廢苑、草青青、
一騎今朝發野亭。　一騎、今朝、野亭を發す。
誰道別君行路遠。　誰か道ふ、君に別れて行路遠しと、
去時人醉到時醒。　去る時人醉うて、到る時醒む。

【字解】〔一〕吳王廢苑　長洲苑を云ふ、吳王は夫差。

【語義】この詩は、親戚舊知と會飲したる後、宴散じ、そこより出でて城西の客舍に至りし後、賦して、その人人に寄せたといふので、青邱が蘇州から妻江に歸らうとした時の作であらう。

【詩意】長洲苑に春草青青たる折から、われは、今日唯だ一騎、野亭より發し、これから、江上の寓居に歸るのである。君に別れて、すでに遠く來たと誰が言ふか、立ち去る時は醉つて居たが、ここに著した時は醒めて仕舞つたので、その行程は、ほんの一寸した醉醒の間である。

## 過山家

山家を過ぐ

流水聲中響緯車。　流水聲中、緯車を響く、

【字解】〔一〕緯車　絲を繰る車。

板橋春暗樹無花。　板橋、春は暗くして、樹に花なし。
風前何處香來近。　風前、何の處か香來ること近し、
隔崦人家午焙茶。　崦を隔つるの人家、午に茶を焙る。

【語義】説明に及ばぬ。

【詩意】流水聲中に絲を繰る小車が響き、板橋の邊、春は暗く曇つて、木木の花は、跡をも留めない。折から、風前、何處とも知らず、香氣が近く吹いて來たが、これは、小山の彼方なる人家で、眞晝に茶を焙じて居るのであつた。

【三】焙茶　焙はほうじる。

## 雲山樓閣圖

碧樹香臺錦繡連。　碧樹香臺、錦繡連る、
畫師應見亂離前。　畫師、應に見たるなるべし亂離の前。
如今風景那堪寫。　今の如き、風景那ぞ寫すに堪へむ、
廢寺空山鎖暮煙。　廢寺空山、暮煙に鎖す。

【語義】説明に及ばぬ。

【詩意】碧樹の間に寺の樓閣が隱見して、さながら錦繡の連りたるが如く、畫師は、亂離の前に於ける實況を見たことがあつて、それを寫生したのであらう。しかし、刻下の風景は、とても寫すに堪へられないので、一たび騷亂を經た後は、物外の境に於ても、寺は廢し、山は空しく、唯だ暮煙に鎖されて居るのみである。

## 始自西山移寓江渚夜聞雨有作

客身移宿浦雲東。　客身、移つて宿す浦雲の東、
孤館殘燈與舊同。　孤館殘燈、舊と同じ。
夜靜空江無落葉。　夜は靜に、空江、落葉なく、
雨聲驚不似山中。　雨聲、驚くは山中に似ず。

【語義】この詩は、はじめて西山から移つて、婁江の岸上に寓した時、夜、雨を聞いて作つたのである。

【詩意】一身、客となつて、雲立ちこむる入江の東に寓を移したが、一つ家に燈火の消え殘りたる有

様は、蒼居と同じである。山中では、飛雨と落葉とが相和して、その聲、一しほ闇がしく、仍つて、頻りに心を驚かしたが、ここでは、空江に落葉なき故、夜は靜かにして、雨聲に驚くことも、山中に居る時程では無い。

## 晩過浦西橋

晩に浦西橋を過ぐ

春水何長春日短。　春水何ぞ長く、春日短き、
沙鴨交眠綠莎暖。　沙鴨交も眠つて、綠莎暖かなり。
晩過橋西不見人。　晩に橋西を過ぎて人を見ず、
野梅零落江雲斷。　野梅零落して江雲斷つ。

【題義】浦西とは、婁江の入り江を指したのであらう。

【詩意】春水何ぞ長く、春日何ぞ短き、家鴨は、交る眠つて、綠色なす莎草も暖かさうに見える。日暮、橋西を過ぎ行くと、人は見えず、野梅は風に散つて、江天の雲も途斷え勝ちである。

【字解】(一)沙鴨　岸邊に居る家鴨。(二)綠莎　莎は澤草、前に數ぼ見ゆ。

## 歎庭樹

庭樹を歎ず

偶移弱質傍庭皐。　偶ま弱質を移して、庭皐に傍ふ、
風露離離已便高。　風露離離として、すでに便ち高し。
翻笑園中栽樹者。　翻へつて笑ふ、園中樹を栽うるもの、
十年猶未出蓬蒿。　十年猶ほ未だ蓬蒿を出でず。

【題義】この詩は、庭樹の生長を見るにつけて、感慨を起したのである。

【詩意】ふと、若くして弱弱しい木を庭の澤地の近くに移植した處が、どんどん大きくなつて、今では、風露紛紛として見上げるばかりに高い。笑ふべきは、園中に此樹を植ゑた主人公たる自分が、十年の久しき、依然として蓬蒿を出でず、少しも、發展せぬことである。

【字解】(一)偶　たまたま、偶然、ふと。(二)弱質　若くして弱弱しきを云ふ。(三)庭皐　庭の澤地。(四)離離　紛紛たる貌。(五)蓬蒿　よもぎの生えて居る處、草莽・草野に同じ。

## 雨中春望

雨中春望

郡樓高望見江頭。　郡樓、高く望んで江頭を見る、
油壁行春事已休。　油壁、春を行つて、事、すでに休す。
落盡棠梨寒食雨。　棠梨を落ち盡す、寒食の雨、

【字解】(一)油壁　樂府に、妾乘三油壁車、郎乘三青驄馬一とあつて、油を引いた布の幕を垂れた車。(二)棠梨　海棠梨の類。(三)寒食　前

只應啼鳥不知愁。　只だ應に啼鳥、愁を知らざるべし。

【語義】説明に及ばぬ。題下の原注に「時に園中に在り」と見えて居る。

【詩意】郡治の樓の高い處から遠望すると、江頭が見えるが、今しも、城は圍まれて居て、油壁の車に乘つて、春景色を尋ね廻ることは、絶對に出來ない。寒食の日、雨瀟瀟として降り注ぎ、折角咲き誇つて居た棠梨の花どもは、皆落ち盡し、唯だ啼く鳥だけは、愁を知らぬ樣に思はれる。

## 夜齋見螢火

夜齋、螢火を見る

拂竹緣莎復點苔。　竹を拂ひ、莎に緣り、復た苔に點ず、

夜窓無月見飛來。　夜窓月なくして、飛び來るを見る。

舊書亂後都拋却。　舊書、亂後、すべて拋却し、

懶就微光更展開。　微光に就いて、更に展開するに懶し。

【語義】説明に及ばぬ。

【詩意】螢は竹を拂ひ、莎草に縋り、又青苔に點し、夜窓に月なき頃、ひよつと飛んで來る。騷亂の後、舊藏の書籍は、すべて拋棄して仕舞ひ、螢の微けき光に就いて、又ぞろ繰り廣げて讀むといふ氣にもならず、折角ながら、螢火は、今殆んど用の無いものに成つて仕舞つた。

【字解】〔一〕舊書　舊藏の書籍。〔二〕就微光　晉書に「車胤、字は武子、精勤倦まず、博覽多聞。家貧にして油なし。夏月は、練囊に數十の螢火を盛り、以て照らして書を讀む」とある。





## 湖上見月憶家兄

湖上月を見て家兄を憶ふ

望月思兄意轉迷。　月を望んで兄を思ひ、意轉た迷ふ、

孤帆應宿楚雲西。　孤帆、應に宿すべし楚雲の西。

夜深愁向湖邊立。　夜は深く、愁へて湖邊に向つて立つ、

爲有寒鴻相竝棲。　寒鴻の相竝んで棲むあるが爲めなり。

【語義】説明に及ばぬ。青邱の兄は、前に數ば見えた通り、淮張に仕官せし咎に因つて、遠地に遷謫された。

【詩意】月を望んで、わが兄を思ふと、この心は、途方に暮れるばかり、兄は、孤帆を卸して、今夜、楚雲棚引く其西に舟を泊されることであらう。われは、深夜に愁を含んで湖邊に立つて居るが、そは、寒げなる雁が二羽相竝んで、岸邊に住んで居るからで、これを見ると、人にして雁に若かずといふ樣な悲哀の想に堪へられぬ。

【字解】〔一〕寒鴻　寒げなる雁。

## 逢吳秀才、復送歸江上

吳秀才に逢ひ、復た江上に歸るを送る

江上停舟問客蹤。　江上舟を停めて、客蹤を問ふ、
亂前相別亂餘逢。　亂前相別れて亂餘に逢ふ。
暫時握手還分手。　暫時手を握つて還た手を分つ、
暮雨南陵水寺鐘。　暮雨南陵、水寺の鐘。

【題義】吳秀才の名字閥歴は不詳。江上は揚子江岸であらうが、何地とも分からぬ。この詩は、吳秀才に逢ひ、そして、その江上の故郷に歸るを送つたのである。

【詩意】婁江の邊に於て君に逢ひ、仍つて、舟を停めて、これまで何處を流浪したかといつて、取り敢へず、その蹤跡を問うた。おもへば、亂前に於て相別れ、そして、今、亂後に於て再會したので、騷亂の間を通じて、君も隨分難儀を爲されたことであらう。しかも、すぐ又別れるといふので、暫時手を握り、翻つて又手を分つ呆ッ氣なさ。折しも、暮雨霏微の中に、南陵なる水寺の鐘は、隱隱として響きわたり、一しほの寂しさを添へた。

【餘論】この詩が、青邱の七絶中、壓卷の名作たることに就いては、誰しも異論なく、眼前の景、口頭の語、自然盡きざるの妙趣がある。齋藤拙堂は、絶句類選中に於て之を評し「これを唐人の集中に入るるも、亦た分ち難し」といつた。それから、第三句は語意一轉、且つ聊か理窟めいた處があるので、絶句で理窟を言はうとすれば、第三句に限るべく、この詩が恰も其例に成るのである。

【字解】【一】江上　多分婁江の邊で、題中に見えた江上とは、無論意味が別である。【二】客蹤　客となつて流浪した跡。【三】南陵　地名。【四】水寺　水邊の寺。

## 十宮詞

十宮詞

### 吳宮

吳宮

芙蓉水殿屧廊東。　芙蓉の水殿、屧廊の東、
白苧秋來不耐風。　白苧、秋來、風に耐へず。
教得君王長夜醉。　君王をして長夜に醉ふを得せしむ、
月明歌舞在舟中。　月明かにして、歌舞、舟中に在り。

【題義】宮詞は、宮中、殊に後宮に於ける遺事を敍するもので、ここには、吳・楚・秦・漢・魏・晉・齊・陳・隋・唐の十國を歴詠したから、總括して、十宮詞と題したのである。

【字解】【一】水殿　前に卷十二、水殿圖の題畫の項に詳說して置いたが、越絶書に「吳王、姑蘇臺を起し、春宵宮を立てて、長夜の飲をなし、天池を作り、池中に青龍舟を作り、日に西施と水嬉を爲す」とあり、李白の詩に、風動三荷花一水殿香、姑蘇臺上宴三吳王一とあり、なほ衞萬の吳宮怨に、君不レ見吳王宮闕臨レ江起、不レ捲二珠簾一見三江水一とある。【二】屧廊　卽ち、響屧廊、前に卷五、靈巖寺響屧廊題下に引いたが、姑蘇志に「響屧廊は、靈巖山に在り。相傳ふ、吳王、廊を建てて、その下を虛しうし、西施をして、宮人と步屧これを繞らしむれば響く、故に名づく」とある。【三】白苧　白き麻衣。

【詩意】蓮の花さき匂ふ水殿は、響屧廊の東に當つて、姑蘇臺に屬して居る。折から、秋すでに至り、白い麻衣では、涼し過ぎて風に耐へられない。月の明かなるを幸に、席を舟中に移して歌舞をなし、君王をして、長き夜に醉はしめ、豪興限りなく、まことに大したことである。

【餘論】朱竹垞は、十宮詞の中、この首を以て第一となし「季迪の楚宮詞に云ふ、細腰無限空相妒、不覺瑤姫夢裏逢と。秦宮詞に云ふ、掖庭無用恩難報、願上蓬萊采藥船と。魏宮詞に云ふ、至尊莫信陳王賦、那得三人間有三洛神一と。思、深からざるに非ず、第だ巧を傷む。呉宮の雅に近きに若かざるなり」といつて居る。

## 楚宮

雨去雲來十二峰。
渚宮樓閣暮重重。
細腰無限空相妒。
不覺瑤姫夢裏逢。

雨は去り、雲は來る十二峰、
渚宮の樓閣、暮に重重。
細腰無限、空しく相妒む、
覺らず、瑤姫の夢裏に逢ふを。

【字解】【一】雨去雲來　宋玉の神女賦に「妾は、巫山の陽、高邱の阻に在り、旦に朝雲とあり、暮に行雨となり、朝朝暮暮、陽臺の下」とある。【二】十二峰　即ち巫山の十二峰、四川省志に「巫山は、夔州巫山縣の東三十里に在り、形、巫の字の如し、峰十二あり、曰く、望霞・翠屏・朝雲・松巒・集仙・聚鶴・淨壇・上昇・起雲・棲鳳・登龍・登聖なり」とある。【三】渚宮　江邊の離宮。【四】細腰　後漢書馬廖傳に「楚王、細腰を好めば、宮中、餓死多し」とある。【五】瑤姫　即ち巫山の神女。前に卷一、巫山高の詩中に引いたが、襄陽耆舊傳に「赤帝の女を瑤姫といふ。未だ行かずして卒し、巫山の陽に葬る。故に巫山の女といふ。楚の懷王、高唐に游び、夢に神と遇ふは、即ち此れ」とある。

【詩意】巫山の十二峰は、暮雨去り、朝雲來り、情思長しへに盡きず、そして、水邊の離宮なる樓閣は、日暮に重なり合つて見える。楚宮の中には、細腰の美女が數かぞりもない程多く居て、互に妬み合つて居るが、君王が夢中に瑤姫に逢つて、これを親幸されたといふことは、誰も感づくものがない。

## 秦宮

宮閉驪山靜管絃。
翠華巡狩去經年。
掖庭無用恩難報。
願上蓬萊采藥船。

宮は閉ぢて、驪山、管絃靜かなり、
翠華巡狩、去つて年を經たり。
掖庭無用、恩、報じ難し、
願はくは上らむ蓬萊采藥の船。

【字解】【一】宮閉　宮は阿房宮。一統志に「阿房宮は、咸陽縣東二十五里に在り、秦の始皇、渭南の上林苑中に建つ」とある。【二】驪山　山の名、阿房宮の中に取り込められて居る、杜牧の阿房宮賦に驪山北構而西折、直走二咸陽一とある。【三】翠華　翡翠の羽を飾とした天子の旗で、鹵簿の先頭に立てる。【四】巡狩　天下を巡行すること。史記始皇本紀に「二十八年、東、鄒縣を行り、泰山に封じ、梁父に禪す。二十九年、東游して、陽武博浪沙に至り、之罘に登る。三十二年、碣石に之き、燕人盧生をして羨門高誓を求めしむ。三十七年、出游して蜚夢に之き、九嶷を望み、江に浮んで下り、籠柯を

親、海渚を渡り、丹陽を過ぎ、錢塘に至り、浙江に臨み、會稽に上り、南海を望み、還つて吳を過ぎ、北、齊郡に至り、平原津に至つて病み、沙邱の平臺に崩ず」とある。【四】 蓬萊　後宮、漢書百官公卿表に「太初元年、永巷を改めて掖庭となす、丞八人」とある。【六】 蓬萊采藥船　始皇本紀に「二十六年、齊人徐市等、上書して言ふ、海中に三神山あり、名を蓬萊・方丈・瀛洲といひ、仙人これに居る。請ふ、齋戒して、童男女と之を求むるを得むと。ここに於て、徐市を遣し、童男女數千人と海に入つて神仙を求めしむ」とある。

【詩意】 阿房宮は閉ぢた儘で、驪山の邊には、管絃の聲だにせず、極めて物靜かであるが、そは、君王が翠華の旗を押し立て、巡狩に出かけられて、年を經たからである。妾は、後宮に居ても、何の役にも立たず、そして、從來の高恩は、なかなか報い難きに因り、せめては、童男童女の輩に交り、仙人を探がし出す御手傳として、蓬萊に藥を采る船に乘りたいと思つて居る。

## 漢宮

酒醒金屋曙河流。
願賜銅盤一滴秋。
他日君王作仙去。
瑤池猶幸得同游。

酒醒めて、金屋、曙河流る、
願はくは賜はらむ銅盤一滴の秋。
他日、君王、仙と作つて去らば、
瑤池、猶ほ幸に同游を得む。

【字解】【一】 金屋　前に卷一、長門怨の詩中に引いたが、漢武故事に「帝、膠東王たり、年數歲。長公主、指して問うて曰く、見、婦を得むと欲するや否や。曰く、得むと欲す。阿嬌を指して、好きや否やといふ。笑つて曰く、もし阿嬌を得ば、當に金屋を爲つて之を貯ふべし」とある。阿嬌は、卽ち後の陳皇后。【二】 曙河　銀河。【三】 銅盤　卽ち承露盤、前に數ば見ゆ。【四】 瑤池　西極に在つて西王母の居る處。

【詩意】 陳皇后の居る黃金の屋に、銀河斜に傾く頃、酒は、醒めはてたが、秋の夜、承露盤に溜まつた雲表の露の一滴を頂戴したいと思ふ。さうすると、他日、君王が昇仙される時も、相變らず御供をして、遠き瑤池までも同行することが出來るであらう。

## 魏宮

翡翠明珠入貢頻。
承恩長占鄴宮春。
至尊莫信陳王賦。
那得人間有洛神。

翡翠明珠、入貢頻りなり、
恩を承けて長く占む鄴宮の春。
至尊、信ずる莫れ陳王の賦、
那ぞ人間に洛神あるを得む。

【字解】【一】 翡翠明珠　翡翠の羽と眞珠。通鑑に「魏の黃初二年、魏王丕、使を遣して、大貝、明珠、象尾、玳瑁、孔雀、翡翠、翫鴨、長鳴雞を吳に求む。吳の羣臣曰く、荆揚の貢、常典あり、魏の求むるところ、我に於て瓦石のみ、孤、何ぞ惜まむや、具へて以て之に與へよ」とある。【二】 鄴宮　一統志に「曹操、都を鄴に建つ、今の彰德府」とある。【三】 至尊　文帝、卽ち曹丕を指す。【四】 陳王　曹植、文帝の弟、謚して陳思王といひし故に云ふ。【五】 賦　卽ち洛神賦。【六】 洛神　文選曹子建、洛神賦の李周翰注に「曹植は、魏の武帝の第三子、はじめ東阿王に封ぜられ後、改めて雍邱王に封ぜらる。死するや、謚して陳思王といふ。洛神は、洛水に

離れて、神と爲るを謂ふなり、植、感するところあり、託して賦す」とあり、李善注に「植、はじめ、甄逸の女を求めしが遂げず、後、太祖回つて五官中郎將(卽ち曹丕)に與ふ。植、殊に平かならず、晝思ひ、夜想ひ、寢と食とを廢す。黃初中、入朝するや、帝、植に甄后の玉鎖金帶枕を示す。植、これを見て、覺えず泣下る、時に已に郭后の爲に讒死す。帝、意、尋いで悟り、因つて、與に宴飲し、偽つて、枕を以て植に賚ふ。植、還つて帳幄を度り、將に洛水の上に息はむとし、因つて甄氏を思ひ、忽ち見るあるが若し、遂に其事を述べて感甄賦を作ち、後、明帝、これを見て、改めて洛神賦となす」とある。

【詩意】南方の吳からは、翡翠だの明珠だのいふ珍らしいものを打續いて入貢して來る、この時、身は宮女となり、長しへに、鄴宮の春を占めて、君王の恩寵を承けて居た。至尊よ、陳王の作つた賦を信じ玉ふな、いかで、この世に、洛神の如きものあるべきぞ。あれは、ほんの架空の臆說で、美人と稱すべき程のものは、隨方この宮中に居りまする。

## 晉宮　　晉宮

盡日南風永巷開。盡日、南風、永巷開く、
羊車去後玉階苔。羊車去る後、玉階苔なり。
誰知天上無塵地。誰か知らむ、天上塵なきの地、
亦有城南小吏來。亦た城南小吏の來るあり。

【字解】【一】盡日　終日に同じ。【二】南風　小名錄に「童謠に云ふ、南風烈烈吹三白沙一と。南風は、賈后の小字なり」とある、賈后は惠帝の皇后賈氏。【三】羊車　通鑑に「晉の武帝、すでに、吳を平らげ、頗る侈宴を事とす。掖庭、殆んど將に萬人ならむとす。常に羊車に乘じ、その之くところを恣にす。至れば、便ち殿に宴す。宮人、竊うて竹葉を以て戶に插み、鹽汁を地に灑ぎ、以て帝車を引く」とある。【四】城南小吏　晉書惠賈皇后傳に「洛南に盜尉部の小吏あり、姿麗にして容止美なり、すでに、厮役を給ぜられ、忽ち非常の衣服あり、乘、成な、その竊盜を疑ふ。尉、繼うて之を辯ず。賈后の疏親、盜物を求めむと欲し、往いて對辭を聽く。小吏云ふ、先に行いて一老嫗に逢ふ、說く、家に疾病あり、師卜云ふ、宜しく城南の少年を得て、これを厭すべし、暫らく相煩はさむと欲す、必ず重報あらむと。ここに於て、隨つて去り、車に上り、帷を下して龍精中に內る。行くこと十餘里ばかり、六七の門限を過ぎ、龍箱を開けば、忽ち樓閣好屋を見る。問ふ、此れ何の處かと。云ふ、是れ天上と。卽ち香湯を以て浴せられ、好衣美食、將に入らむとして、一婦人を見る、年三十五六ばかり、短形、青黑色、眉後に痣あり、留められること數夕、出づるに臨んで、この衆物を贈らると。聽くもの、その形狀を聞き、皆笑して去り、尉も亦た意を解く」とある。

【詩意】ひねもす南風が吹きすさぶ如く、賈后は淫縱を事として、後宮は開いた儘。武帝の羊車、すでに去りし後、玉階に苔を生せしに、かういふ事に成つたのは、まことに怪訝の至である。誰か知るべき、塵だになく、淸淨を以て稱せらるる天上の地に、城南の小吏を引き入れて來るとは、まことに、言語道斷の事である。

## 齊宮　　齊宮

帖地黃金襯羅。地に帖するの黃金、羅に襯す、

【字解】【一】帖地黃金　黃金を

苑中市罷合笙歌。苑中、市罷んで、合に笙歌すべし。
有人解誦西京賦。人あり、西京の賦を誦するを解す、
添得樓臺火後多。樓臺を添へ得て、火後に多し。

下衣といふが本義で、近づく、接近するの義に用ふ。艶羅は羅織、うす物で造つた足袋。【三】苑中市罷　宮苑中でバザーが開く。東昏侯本紀に「苑中に於て市を立て、太官、毎旦、酒肉雜肴を進め、宮人をして屠酤せしめ、潘氏、市令となり、帝、市魁となり、罰爭するものを執らへ、潘氏に就いて決判せしむ。時に百姓歌うて曰く、閱武堂前種二楊柳、至尊屠肉、潘妃酤酒とある。【四】有人解誦　東昏侯本紀に「永元三年、殿内、火あり、後又璫儁・曜靈等、十餘殿を燒いて、柏殿に及び、北は華林に至り、西は祕閣に至るまで、三千餘間、皆盡く。左右趙鬼、能く西京賦を讀む。云ふ、柏梁既哭、建章是營と。ここに於て、大に諸殿を起し、別に潘妃の爲に三殿市を起し、飾るに金璧を以てす」とある。

【詩意】黄金で蓮花を造つて地上に貼付し、潘妃が羅の襪を穿いて其上を歩き、宮苑の中に於て、バザーが濟んだ頃、笙歌を始めて、游宴するといふ有様。おまけに、君王の御側には、能く西京賦を諳誦して居るものがあつて、その爲に、皇居に火災ありし後、更に多くの樓臺を增建することに成つた。

地上に鋪りつける。南史東昏侯本紀に「金を鑿つて、蓮華となし、以て地に帖し、潘妃をして其上を行かしめて、曰く、これ步步蓮華を生ずるなり」とある。【三】襪羅羅　襪は足袋。

## 陳宮

春風臺閣繡參差。春風臺閣、繡參差、

【字解】【一】臺閣繡參差　層臺高閣が參差として、錦繡の樣であるといふ義。通鑑に「陳の至德二年、後主、臨春・結綺・望仙の三閣を起す、各〻高さ數十丈、連延數十間、その窗牖欄檻は、皆沈檀を以て之を爲り、飾るに金玉を以てし、間ふるに珠璣を以てし、外に珠簾を施し、内に寶帟寶帳あり、その服玩瑰麗、近古未だ有らず、微風漸く至る毎に、香、數里に聞こゆ。その下、石を積んで山となし、水を引いて池となし、奇花異卉を雜植し、上、自ら臨春に居り、張貴妃は結綺に居り、孔二貴妃は望仙に居り、複道往來す」とある。【二】狎客爭進璧月詞　璧月詞とは玉と見まがふ月の如く光彩ある辭句、南史後主本紀に「常に張貴妃・孔貴妃等八人をして夾坐せしめ、江總・孔範等十人、宴に預り、遞して狎客といひ、先づ八婦人をして、采箋を剪いて五言詩を製せしめ、十客、一時纔いで和し、遲ければ酒を罰す、君臣酣歌、夕より旦に達し、これを以て常と爲す。その曲に玉樹後庭花・臨春樂等あり、大略、皆諸妃綺の容色を美す」とある。【三】嬌不起　なまめかしくして起き上り得ぬ。【四】景陽樓　一統志に「景陽樓は、臺城の内に在り、劉宋の元嘉中に建つ。齊の武帝の時、鐘を其上に置き、宮人、鐘聲を聞けば、即ち起つ、因つて、これを促妝樓といふ」とある。

【詩意】臨春・結綺・望仙などいふ層樓高閣に春風の吹き度るとき、さながら、錦繡が高下參差として居る樣に見え、そして、謂はゆる狎客輩は、宴に侍し、爭つて、璧月の如く光彩ある新詞を進める。多くの妃嬪は、幾たびか、酒に醉ふこと濃かにして、景陽樓の上に於て、夜あけの鐘が鳴り響いても、嬌懶の極、身を起すことも出來ぬ位である。

狎客爭進璧月詞。狎客、爭うて進む璧月の詞。
幾度醉濃嬌不起。幾たびか醉濃かにして嬌起たず、
景陽樓上曉鐘時。景陽樓上、曉鐘の時。

## 隋宮

(一)五斛青螺一日銷。
(二)迷樓深貯萬妖嬈。
(三)衆中誰解留車駕。
(四)風浪如山莫渡遼。

【詩意】吳絳仙の如きは、五斛の青螺を一日に消費したといふ位で、迷樓の中には、萬を以て數ふべき程の美人が貯へてある。その多くの女どもの中で、誰か煬帝の親征を諫めて、車駕を留めたか、さふいふ人の無かつたのは、まことに殘念で、遼東に赴くには、山の如き風浪を渡らねばならず、天子の御身には、危險至極の事であるといつて、懇に引き留めれば善かつたのである。

【字解】【一】五斛青螺　青螺は眉すみ、即ち眉を描くに用ひるので、本と貝を潰して造るのである。侍兒小名錄に「隋の煬帝の宮女、吳絳仙、善く長蛾眉を畫く、官吏、日ごとに螺子錢五斛を供す」とある。【二】迷樓　韓偓の迷樓記に「項羽、能く宮室を構ふ、歲を經て成る、千門萬牖、工巧の極、古しへより有るなし。人誤つて入れば、日を終ふと雖も、出づる能はず、煬帝、これに幸し、大に喜び、左右を顧みて曰く、眞仙をして其中に游ばしむるも、亦た當に自ら迷ふべきなり、これを目して迷樓といふべし」とある。【三】萬妖嬈　萬を以て數ふべき美人。【四】留車駕　天子の車を引き止める、隋書煬帝紀に「大業十二年、煬帝、幷に江都に幸せむとす、宮女、半は駕に隨はず、爭ひ泣いて帝を留む、時ふ遼東は小國、以て大駕を煩はすに足らず、と。車を攀ぢて指血缺を流む」とある。【五】莫渡遼　隋書煬帝本紀の贊に「頻りに朔方に出で、三たび遼左に駕し、旌旗萬里、戰殺百萬、骨吏使役、人、命に堪へず」とある。



## 唐宮

(一)玉笛聲殘禁漏長。
(二)雲屏月帳醉焚香。
(三)五王宴罷皆歸院。
(四)大被空閒一夜涼。

【詩意】玉笛の聲、吹き罷んで、禁中の水時刻が緩く響く折から、雲屏月帳の間、醉うて香を焚いて居る。この夕、五王は、宴が畢ると、各〻その屋敷に歸られて仕舞つたから、折角の大きな夜具も、御使用にならず、一夜、冷たい儘であつた。

【字解】【一】玉笛聲殘　殘は靈きる、楊太眞外傳に「明皇、兄弟と同じく處る、紀子、寧王の玉笛を竊んで吹く」とあり、張祜の詩に小窓靜院無三人見二閒把三寧王玉笛一吹とある。【二】雲屏月帳　雲の生ずる屏風、月の照る紗帳、蓋月は全く形容で、天上の富貴、人間に無き趣を寓したのである。【三】五王　玄宗の兄弟五人、皆、王に封ぜられしが故に云ふ、寧王・岐王等。【四】大被　大きな夜具、唐書明皇紀に「上、素より友愛、はじめ位に卽くや、五王帳を置き、長枕大被、兄弟と同じく寢れ、朝起めば、多く諸王を從へて禁中に游び、拜跪、家人の禮の如し、飲食起居、亦た相與に之を同じうす」とある。

## 次韻春日漫興四首、奉酬外舅達翁

春日漫興に次韻す、四首、外舅達翁に酬い奉る

老去風情似樂天。　老去風情、樂天に似たり、
恨無張態抹朱絃。　恨むらくは、張態の朱絃を抹するなきを。
一春酒病稀游賞。　一春酒病、游賞稀なり、
啼鳥鶯花共悵然。　啼鳥鶯花、共に悵然。

【題義】外舅は母方の伯叔父卽ち母の兄弟、その人、姓は不詳。達翁は、字、もしくは號らしく、本名は分からない。この詩は、外舅達翁の作れる春日漫興四首に次韻して、その人に酬いたのである。

【詩意】君は既に老い去れりしものから、風情、なほ存して、さながら、當年の白樂天の樣であるが、樂天が、ひいきにした張態の樣な藝妓の、朱絃を搔き鳴らして興を助けるものなきは、まことに遺憾である。加ふるに、この春は、酒を病み、游賞に出かけることも稀であつて、啼鳥鶯花も、その爲に、自然悵然たる樣に見える。

【餘論】啼鳥鶯花の四字は、甚だ面白くないので、啼鳥の對語で、殘花とでもいふ樣な字が欲しい處である。

【字解】【一】樂天　白居易の字。
【二】張態　白居易の詩に李娟張態君莫嫌、亦擬隨時自敎取とあつて、その注に「李娟張態は蘇妓の名」とある。

水邊簾幙遠籠花。　水邊の簾幙、遠く花を籠め、
游女時時出浣紗。　游女、時時、出でて紗を浣ふ。
記得橫塘沽酒處。　記し得たり、橫塘、酒を沽ふの處、
畫船明月載琵琶。　畫船の明月、琵琶を載す。

【詩意】水邊の亭臺の簾幙は、遠く吹き來る花の香を籠めて、春は、今しも盛りである。游び戲るる女どもは、時時江邊に出かけて、紗を浣つて居る。かつて、橫塘に酒を沽ひし時、明月の下、綺麗な游山船に琵琶を彈く女を載せて、江を上下するもののあつたことを今でも記憶して居る。

雨多池館草毵毵。　雨は多くして、池館草毵毵、
酒色寒銷舊舞衫。　酒色寒銷ゆ舊舞衫。
燕子似憐花落地。　燕子、憐むに似たり、花の地に落つるを。
殷勤長帶軟泥銜。　殷勤、長く軟泥を帶びて銜む。

【詩意】春晩、雨多くして、池館のまはりには、草が毵毵として伸び、舞妓の古い著物には、酒の暈の痕が寒げに消えかかり、當日の風流、今や跡方もなく成つて仕舞つた。唯だ燕のみは、花の地に落

ちたのを氣の毒と思ふかの如く、丁寧にも、軟かい泥と一處に紅の片片を口に銜へて飛んで居る。

菖蒲葉老芷花新。　菖蒲葉は老いて芷花新なり、
池暖鴛鴦護水紋。　池暖にして、鴛鴦、水紋を護す。
不上高樓無遠恨。　高樓に上らざれば、遠恨なし、
江南春盡草如雲。　江南春盡きて、草、雲の如し。

【字解】〔一〕芷花　よろひぐさ、水邊に生ずる一種の香草。

【詩意】岸には、菖蒲の葉が既に老い、芷が新に咲き出で、江水の彎入する處、池は自然暖かいので、鴛鴦は、其處に浮びて、漣波を護る樣な風情。高樓に上らなければ、全く遠恨も無いが、一たび上つて見れば、江南、春、すでに盡きて、一面の新草、天に接して、さながら雲の如く、人をして、斷腸の思に堪へざらしめる。

## 同文　同文

風簾一燭對殘花。　風簾一燭、殘花に對す、
薄霧寒籠翠袖紗。　薄霧、寒く籠む翠袖の紗。
空院別愁驚破夢。　空院の別愁、夢を驚破す、
東闌井樹夜啼鴉。　東闌の井樹、夜、鴉を啼かしむ。

【題義】同文とは、逆に讀んでも、別に一首の詩を爲すもので、この詩を逆讀すると。

鴉啼ニ夜樹一井闌東。夢破驚愁別院空。紗袖翠籠寒霧薄。花殘對レ燭一簾風。

となつて、矢張、完全なる七言絶句に成つて居る。日本でいふ回文は、上から讀んでも、下から讀んでも、同一だといふので、例せば、

なかきよのとおのねふりのみなめさめなみのりふねのおとのよきかな

の如きが、それである。して見ると、廻文に就いては、日本よりも、支那の方が、はるかに進んで居る。なほ廻文の元祖ともいふべき、晉の蘇蕙の璇璣圖は、縱横各一二十九字、計八百四十一字、讀み方に依つては、三四五六七言の詩、三千八百餘首を得られたといふことである。但し、普通に云ふ廻文は、大抵律絶に限られ、その體裁は、この詩の樣なものである。それから、この詩は、ここに掲載した方の解釋に止めて置くから、逆讀の方は、讀者自ら之を試みられたら善からうと思ふ。

【詩意】風に搖らぐ簾の下、一穗の燈火が消えがてに成つて居る處に坐し、恨然として、散り落つる

花に對して居ると、薄霧は、翠色の紗袖を籠めて、寒さは身にしむばかり。人なき庭院に於て、離別の愁に堪へ兼ぬる折しも、東の欄干に近き井戸ばたの木には、宿鴉も眠り穩かならず、眞夜中に啼いて騒いで居る。

## 春日懷江上二首

一川流水半村花。　一川の流水、半村の花、
舊屋南鄰是釣家。　舊屋の南鄰は是れ釣家。

長記歸篷載春醉。　長く記す、歸篷、春を載せて醉ふ、
雲籠殘照雨鳴沙。　雲は殘照を籠め、雨は沙に鳴りしを。

【題義】説明に及ばぬ。

【詩意】さきに居た江邊の居、流水は川に漲り、花は半村を蔽ひ、わが舊寓の南鄰は、釣人の家であつた。春の闌なる頃、歸舟の中で醉を恣にし、折から、雲は殘る夕日を籠め、雨がはらはらと岸邊の沙に注いで鳴つたことは、いつまでも、忘れ得ぬことである。

【字解】〔一〕歸篷　篷は舟の苫、歸舟に同じ。

【餘論】結末二句は、江上の實景、覩るが如く、且つ杳然として神遠きを覺える。

新蒲正綠乳鳧鳴。　新蒲正に綠にして乳鳧鳴く、
水沒魚梁宿雨晴。　水は魚梁を沒して宿雨晴る。

看近清明沈種日。　看る、清明種を沈むるの日に近し、
野人何事不歸耕。　野人、何事か歸耕せず。

【字解】〔一〕乳鳧　雛を哺む家鴨。〔二〕魚梁　魚を捕へる梁。〔三〕宿雨　降り續いて居た雨。〔四〕清明　寒食の後二日。淮南子天文訓に「斗、子を指せば冬至、冬至を距つること四十六日にして立春、十五日を加へて寅を指せば、雨水、十五日を加へて卯を指せば中嶋、故に春分といふ。十五日を加へて乙を指せば清明風至る」とある。〔五〕沈種　種子を水に漬けて置く、發芽を早うする爲めである。陸游の詩に、農事漸興初浸種とある。

【詩意】新しい蒲の芽は正に綠に、雛を哺む家鴨が、その間を泳いで鳴いて居るし、兩三日降りつづいた雨は、やつと晴れたが、水は大分出て、魚梁をも沒する位。看る、種子を水に漬ける清明の節に近くなつたのに、野人たる予が江上に歸耕せざるは何事に因るか、世務の都合上、止むを得ざることとはいへ、まことに、嘆息に堪へぬ。

## 醉仙圖　醉仙の圖

酒滿長生瘿木瓢。　酒は滿つ長生瘿木の瓢、
花開仙館宴春宵。　花開いて、仙館、春宵に宴す。
飛瓊何事堅辭飲。　飛瓊、何事ぞ堅く飲を辭す、
應恐清都誤早朝。　應に恐るべし、清都に早朝を誤るを。

【字解】【一】長生瘿木瓢　長生は、緣起を祝うて命名したのであらう。瘿木瓢は、木の瘤の處を刳つて造つた瓢。呂公著の瘿木壺の詩に曉爾木之瘿、何異二肉有レ贅一とあり、杜甫の詩に長生木瓢示二眞率一とある。【二】飛瓊　前に卷九、蔡經宅の詩中に見えたが、逸史に「許琰、暴に卒す、三日にして甦め、詩を作つて云ふ、曉入二瑤臺一露氣清、坐中唯見許飛瓊と。復た嬰れて驚起し、第二句を改めて云ふ、天風吹下步虛聲と。曰く、昨夜、夢に瑤臺に到る、女三百餘人あり、一に云ふ是れ許飛瓊、二句を改めしむ、世人、我あるを知るを欲せざるなり」とある。【三】清都　列子に「清都紫微、鈞天廣樂、帝の居るところ」とある。【四】早朝　曉早く參朝する。

【題義】説明に及ばぬ。

【詩意】長生と命名した木の瘤の瓢たんには、酒が一ぱい滿ち滿へ、花咲き匂ふ春の夜、仙館に於て、宴が開かれた。許飛瓊といふ坐中の仙女は、何事に因つて、堅く酒を飲むことを辭退するか。おもふに、明日、天帝の居ます清都に、晨早く參朝する刻限を誤つてはならぬと思つて居るからであらう。

## 觀奕圖　奕を觀るの圖



錯向山中立看棋。　錯つて山中に向つて、立つて棋を看る、
家人日暮待薪炊。　家人、日暮、薪炊を待つ。
如何一局成千載。　如何か、一局、千載を成す、
應是仙翁下子遲。　應に是れ仙翁、子を下す遲きなるべし。

【字解】【一】看棋　碁を打つを見る。【二】薪炊　薪を伐つて來て飯を炊ぐ。【三】一局成千載　一番打ち畢るのに千年かかる。前に卷十二、樵の詩中に引いたが、述異記に「信安郡石室の中、晉時、樵者王質、童子の碁するに逢ふ。質に一物を與ふ、棗核の如し。これを食うて飢ふす、斧を坐に置いて觀る。童子曰く、汝の斧柯爛すと。質、鄉閭に歸れば、復た時人なし」とある。

【題義】説明に及ばぬ。奕は圍碁。

【詩意】山中に在つて、立ちながら圍碁を見て居たのは、止せば善かつたので、家人どもは、それとも知らず、日暮に成ると、主人が薪を采つて來て、飯を炊くだらうと思つて待つて居る。如何なれば、一番の勝負で、千年の久しきを經過したか、流石、仙翁だけに、石を下すこと遲く、それで、かくまで手間がかかつたのであらう。

## 江村卽事　江村卽事

野岸江村雨熟梅。　野岸、江村、雨、梅を熟す、

【字解】【一】逡巡　巡は徘徊、前

水平風軟燕飛回。水平かに、風軟かにして、燕飛び回る。
小舟送餉荷包飯。小舟、餉を送る荷包の飯、
遠旆招沽竹醞醅。遠旆、招いて沽る竹醞の醅。

【題義】説明に及ばぬ。

【詩意】野岸打つづく江村では、雨中に梅の實が黄に熟し、水は平かに、風は軟かに、燕が勝手に飛び繞つて居る。野良に出て居る人に對しては、小舟で、蓮の葉に包める飯を辨當として運び、遠くに酒旗の飄つて居る店では、客を招いて、竹葉の色を爲せる新酒を賣つて居る。

【字解】【一】荷包飯　蓮の葉に包んだ飯、柳宗元の詩に絲荷包ノ飯給壇人とある。【二】遠旆　遠くに見ゆる酒旗。【三】竹醞醅　竹葉の色に見ゆ。

## 偶睡

竹間門掩似僧居。竹間、門は掩うて僧居に似たり、
白荳花開片雨餘。白荳、花は開く片雨の餘。
一榻茶煙成偶睡。一榻の茶煙、偶睡をなす、
覺來猶把讀殘書。覺め來つて猶ほ把る讀殘の書。

【字解】【一】白荳花　白い豆の花。【二】片雨　一しきり降つた小雨。【三】偶睡　偶然の晝睡。【四】讀殘書　讀み終つた書物。

【題義】説明に及ばぬ。なほ、字解の項を見よ。

【詩意】竹の間なる小さき門は、しめてあつて、物靜かなことは、丸で僧菴の如く、雨一しきり降り過ぎし後は、白い豆の花が咲き出した。茶煙の緩く立ち上る處に於て、心のどかに榻に倚りかかり、思はず、晝寢をしたが、覺めて後も、相變らず、讀み終つた書物を手にして居た。

## 舟歸江上過斜塘

漫漫村塘水沒沙。漫漫として村塘、水、沙を沒す、
清明初過已無花。清明、初めて過ぎて、すでに花なし。
春寒欲雨歸心急。春寒、雨ならむと欲して歸心急、
嬾住扁舟問酒家。扁舟を住めて、酒家を問ふに嬾し。

【字解】【一】漫漫　水の滿ち溢へたる貌。【二】村塘　村に近き堤。【三】清明　前に春日憶江上の詩中に見ゆ、寒食の前二日。

【題義】説明に及ばぬ。斜塘は、無論、地名であらう。

【詩意】村塘には、水漫漫と滿ち溢へて、岸上の沙をも沒するばかり、清明の節がやつと過ぎたばかりであるのに、花は皆散り過ぎて仕舞つた。折から、春やや寒く、雨が降つて來さうに成つたから、早く江上の寓居に歸りたいと心に念ずるのみで、斜塘の酒家を過ぎても、わざわざ舟を停めて、これ

を訪ふ氣には成らなかつた。

## 西齋庭前海棠

西齋庭前の海棠

寂寥銀燭與金盤。寂寥たり銀燭と金盤と、
睡足簾前怯曉寒。睡足つて、簾前、曉寒を怯る。
不是詩人賞幽興。これ詩人の幽興を賞するならずんば、
雨中深院有誰看。雨中の深院、誰かあつて看む。

【題義】説明に及ばぬ。西齋は、青邱の家なる西の書齋である。

【詩意】銀燭と金盤とは、昨夜の儘に取り殘されて、寂しげに見え、海棠は、睡い、方に足りて、却つて、曉寒を怕れる風情がある。流石に、詩人は、かかる時の幽興を愛づるが、それ以外には、折から雨降り注ぐ深院に於て海棠の惱めるを看る人もない。

【字解】【一】銀燭　東坡の詩に只怕花深花睡去、高燒二銀燭一照二紅粧一とある。【二】金盤　黃金製の盤中には御膳走を盛るのであらう。【三】睡足　玄宗が楊貴妃の眠つて居るのを見て、海棠睡足るといつた。

## 次張仲和春日漫興

張仲和の春日漫興に次す

蘇小墳前柳似煙。蘇小の墳前、柳、煙に似たり、
秋千人靜夕陽天。秋千、人靜かに、夕陽の天。
獨騎欵段尋詩去。獨り欵段に騎して、詩を尋ねて去る、
嬾逐看花衆少年。逐ふに嬾し看花の衆少年。

【題義】説明に及ばぬ。但し、張仲和の本名竝に閲歷等は不詳。

【詩意】蘇小の墓の前なる柳は、緑に打煙り、ブランコの游戯をする少女輩も居らず、夕日の頃は、極めて靜かである。この時、君は、欵段の馬に跨り、ぽこぽこと緩ツくり歩ませて、詩を尋ねて行き、花を看る多くの少年どもの後を逐ふことを嬾しとして居る。

【字解】【一】蘇小　古しへの名妓、吳地記に「嘉興縣前、晉の妓蘇小小の墓あり」と記し、樂府廣題に「蘇小小は、錢唐の名倡なり、南齊の時の人」とあつて、兩者各〻異なれども、兎に角、著名なる妓女。今も、西湖の西泠橋畔に其墓と稱するものが殘つて居る。但し、ここのは、嘉興に在るものを指したのであらう。【二】秋千　後には鞦韆の字を用ふ、ブランコ、婦人の游戯。【三】欵段　後漢書馬援傳に「欵段の馬を御す」とあつて、その注に「欵は、猶ほ緩のごときなり、形段の遲緩を言ふなり」とある。

## 與內弟周思敬晚過雁蕩僧舍

內弟周思敬と晚に雁蕩の僧舍を過ぐ

同過溪橋日欲晡。同じく溪橋を過ぎて、日、晡せむと欲す、

【字解】【一】日欲晡　日が暮れ

遠林殘葉似栖烏。　遠林の殘葉、栖烏に似たり。
照公院裏堪留宿。　照公院裏、留宿に堪へたり、
已有梅花有酒無。　すでに梅花あり、酒ありや無や。

【題義】内弟周思敬は、前にも見えて居た。雁蕩僧舍は、卽ち幻住棲雲堂、前に卷六に見え、その題義の項にも引いて置いたが、姑蘇志に「闡門外雁蕩村に在り、元の大德間、僧明本、その地名の雁蕩山と合ふを喜び、遂に草庵を此に結ぶ。趙孟頫、爲に之に名づけて棲雲といひ、その後、別に精舍を創して、今の名に改む」とある。

【詩意】打連れて溪橋を渡ると、日は將に暮れむとし、遠林に纔か殘れる枯葉は、棲烏と見まがふばかり。照公の居る幻住棲雲堂は、一泊するのに丁度善い處で、梅花はあつたが、酒は有るか如何か、取り敢へず尋ねて見やう。

白傅湓浦圖　白傅湓浦の圖

相逢淪落總天涯。　相逢ふ、淪落、すべて天涯、
舟泊湓江近荻花。　舟は湓江に泊して、荻花に近し。

【字解】【一】淪落　落ちぶれる。【二】湓江　潯陽、卽ち今の九江に在る揚子江の支流。【三】逐客　都より逐はれて左遷された人、卽ち白樂天を指す。【四】青衫　白樂天の琵琶行に就中泣下誰最多、江州司馬青衫濕とある。



かがる。【三】照公　自注に「照公は卽ち幻住の僧明本」とある。

逐客青衫自多淚。　逐客の青衫、自ら淚多く、
傷心不用怨琵琶。　傷心、用ひず琵琶を怨むを。

【題義】白傅は、白樂天、晩年、太子少傅となりしが故に云ふ。湓浦は、卽ち湓江の入口。樂天は、客を送る時、ここに琵琶を彈ずる女に逢つて、琵琶行と題せる古詩を作つた。その詳は、前に卷十二、湓浦琵琶圖の詩中に見えたから、ここには、再說せぬことにする。

【詩意】白樂天と琵琶を彈ずる商婦と、此處に於て偶然邂逅したが、二人とも、天涯に淪落した哀れな境涯。折しも、二人の舟は、湓江に泊して、荻の花に近い處にかかつて居る。就中、白樂天は、遷謫された身の、さなきだに、淚多くして青衫を溼すを免れぬ位、たとひ、心を傷ましめたからといつて、琵琶を怨むにも及ばぬことと思ふ。

陶穀驛亭圖　陶穀驛亭の圖

酒闌使騎趣歸時。　酒闌にして、使騎、歸るを趣すの時、
羞殺江南一曲詞。　羞殺す、江南一曲の詞。

【字解】【一】使騎　騎馬の使者。【二】何似　如何ぞやの義。【三】党家兒　前に卷四、映雪圖の詩中に

借問驛亭相見者。　借問す、驛亭、相見るもの、
風流何似党家兒。　風流、何似ぞや党家の兒。

見え、事文類聚に「陶穀、党家の姫を得たり、冬日、雪水を取つて茶を煎、姫に謂つて曰く、党家、この風味を識るや否や。姫曰く、彼れ粗人、安んぞ此を得む、但だ能く銷金帳底、淒斟低酌、羊羔美酒を飲むのみ」とある。

【題義】南唐拾遺記に「陶穀、江南に使するや、甚だ書を韓熙載に假らむと欲し、館伴をして、驛中に六朝の書を謄さしめ、半年にして乃ち畢る。穀、伎秦蘒蘭を見、以て驛吏の女となすや、遂に愼獨の戒を敗り、長短句を作り、以て之に贈る。明日、中主、穀を燕す、穀、毅然として犯すべからず、中主、觥を持して立ち、蘒蘭をして、出でて續斷絃の曲を歌うて觴を侑めしむ。穀、大に慙ぢて罷む。詞は風光好と名づく。云ふ、

好因緣。惡因緣。祇得郵亭一夜眠。別二神仙一琵琶撥盡相思調。知音少。再把二鴛膠一續二斷絃一。是何年。

それから、金檀の按に「沈遼任の杜娘傳には、この事を以て、穀が吳越に使するの事となす、而して、女伎は杜娘、蘒蘭に非ざるなり」といつて居る。

【詩意】酒闌にして、寓館から騎馬の使者が迎へに來て、歸るを促した時、秦蘒蘭といふ妓女が、江南一曲の詞を歌ひ出せしに因り、今まで、鹿爪らしく構へて居た陶穀も、流石に差ぢ入つて仕舞つた。試に、當初相見たる秦蘒蘭その人に問ふが、陶穀の風流は、党家の主人に比較して如何であるか。妓女たる汝を驛吏の娘と間違へたなどは、聊かとぼけて居て面白い。

## 客夜聞女病

客夜、女の病めるを聞く

歲盡歸期尚杳然。　歲盡きて、歸期、尚ほ杳然、
不知汝病復誰憐。　知らず、汝病んで、復た誰か憐む。
隔鄰兒女燈前笑。　鄰を隔つる兒女、燈前に笑ふ、
客舍愁中正獨眠。　客舍、愁中正に獨り眠る。

【題義】説明に及ばぬ。題下の原注に「時に錢塘に在り」と記してあるから、青邱が吳越に游んだ時の作であらう。

【詩意】今年も暮れむとして居るが、いつ歸鄕するか、その期は、杳然として分からず、汝は、病氣に苦んで居るといふが、誰が、いたはつて看護して居るか。鄰家の兒女は、燈前に笑ひ騷いで居るが、われは、客舍に在つて、その聲を聞きつつ、愁中、今しも獨りで眠らうとする處である。

【字解】【一】歲盡　歲が暮れる。
【二】隔鄰　鄰家。

## 秋江晩渡圖

秋江晩渡の圖

鷓鴣飛盡一洲蘋。鷓鴣飛び盡す一洲の蘋、
帆帶秋雲度遠津。帆は秋雲を帶びて遠津を度る。
底事愁看畫中景。底事ぞ、愁へて看る畫中の景、
昨朝曾送渡江人。昨朝、かつて送る江を渡るの人。

【語義】説明に及ばぬ。

【詩意】鷓鴣は飛び盡し、蘋は茂つて洲に滿つる頃、舟は帆を揚げて、秋雲を帶びたまま、遠い舟つきの港に向つて居る。何故に、かくの如き畫中の景色を見て、愁に堪へずして居るかといへば、つい昨日、江を渡つて旅する人を送つたばかりで、その離別の恨が、まだ殘つて居るからである。

【字解】〔一〕遠津　津は舟つきの處、渡頭、卽ち港。

## 夜中有感二首

夜中、感あり　二首

少壯無歡似老時。少壯、歡なく、老時に似たり、
身窮寧坐苦吟詩。身窮する、寧ろ詩を苦吟するに坐せむや。

【字解】〔一〕無歡　喜ばしい事もない。〔二〕身窮　身命窮まる。〔三〕問關　落ちぶれて流浪する。



臥思三十年來事。臥して思ふ、三十年來の事、
一半問關在亂離。一半は問關して、亂離に在り。

【語義】説明に及ばぬ。

【詩意】われは、齡なほ少壯なれども、絶えて喜ばしい樣な面白い事もなく、丸で棺桶に半分足を入れた老人の如くであるが、この身の窮するは、詩を苦吟した其爲めでもなからう。臥して三十年來の事を思ふと、その半以上は、亂離の世に際し、落ちぶれて流浪する内に打過ごした。

【字解】〔一〕亂離　世が亂れて、離れ離れになる。

倦僕廚中睡已安。倦僕、廚中、睡、すでに安し、
吹燈呼起冒霜寒。燈を吹き、呼び起して霜寒を冒す。
酒醒無限悲歌意。酒は醒む、無限悲歌の意、
不覓書看覓劍看。書を覓めて看ず、劍を覓めて看る。

【詩意】疲れた家僕は、臺所で、ぐうぐう睡つて居るが、風でも引いては成らぬといふので、霜夜の寒を冒して、そこまで出かけ、燈火を吹き消し、呼び起して、臥牀に行かしめた。われは、酒、すでに

【字解】〔一〕倦僕　疲れた家僕。〔二〕吹燈　燈火を吹き消す。〔三〕覓劍看　杜甫の詩に檢書燒燭短、看劍引杯長とある。

に醒め、悲歌無限の意に堪へず、そこで、書物を探がして讀まうとはせず、劍を取り出して、ぢつと眺めあかして居る。

【餘論】結二句は淒涼無限、これに因つて、作者の血性を想見することが出來る。

## 徐記室謫鍾離、歸後同登東邱亭

徐記室、鍾離に謫せられ、歸後、同じく東邱亭に登る

同上高亭一賦詩。　同じく高亭に上つて、一たび詩を賦す、

喜逢君是謫歸時。　喜んで君に逢ふ、是れ謫歸の時。

不然此日登臨處。　然らざれば、この日、登臨の處、

應望天涯有遠思。　應に天涯を望んで遠思あるべし。

【題義】徐記室は卽ち徐賁、この詩は、徐賁が淮張に仕官した爲に、その滅亡後、明の太祖から罰せられて鍾離に流謫されたが、程なく赦されて歸りしに因り、同じく東邱亭に登つて作つたのである。東邱は、原注に「虎邱志に見ゆ」とあり、卽ち同地の一名勝である。

【詩意】二人同游して、東邱の高亭に上つて詩を賦した。喜ぶべきは、君が流謫を赦されて歸つて來たといふ其日出たい時に逢つたことである。若し、さうでなければ、この日、ここに登臨しても、遙に天涯を望んで、遠く君を思ふ愁に堪へなかつたであらう。

## 將赴金陵、始出閶門夜泊、二首

將に金陵に赴かむとし、はじめて閶門を出でて夜泊す　二首

烏啼霜月夜寥寥。　烏は霜月に啼いて、夜寥寥、

回首離城尙未遙。　首を回らせば、城を離れて尙ほ未だ遙

正是思家起頭夜。　正に是れ家を思ふ起頭の夜、

遠鐘孤棹宿楓橋。　遠鐘孤棹、楓橋に宿す。

【字解】【一】霜月　霜と月とを竝び擧げたのである。【二】寥寥　聲なくして靜なる貌。【三】起頭　きつかけ、最初、第一の譯。

【題義】金陵は南京、閶門は蘇州城の西の門、そこから、水陸いづれでも、日本里數一里ばかりで、寒山寺の在る楓橋に行ける。この詩は、史官に徵されて南京に赴かむとし、はじめて、閶門より舟を漕ぎ出し、夜、楓橋に泊して作つたのである。

【詩意】一天霜降り、月、將に斜ならむとする頃、烏が啼き出して、夜は遙よ寂しく、首を回らして東望すれば、蘇州城を離れて、まだ幾らも來て居ない。さはれ、これは旅中家を思ふ最初の夜であつ

て、名だたる遠鐘の聲を聞いて、孤棹を停め、ここ楓橋に宿したのである。

【餘論】月落烏啼といへる張繼の詩が一たび流傳せしより、寒山寺も、楓橋も、極めて著明なる名勝となり、この詩も、その楓橋に宿せしに因り、張繼の詩より一轉して出したもので、後半は、聊か新警の趣がある。但し、寒山寺は、楓橋の直ぐ側に在るので、遠鐘の二字は、聊か當らぬ樣に思はれる。

(一)煙月籠沙客未眠。　煙月、沙を籠めて、客未だ眠らず、
歌聲燈火酒家前。　歌聲燈火、酒家の前。
如何纔出閶門外。　如何か、纔に閶門の外に出づれば、
已似(二)秦淮夜泊船。　すでに似たり、秦淮夜泊の船。

【詩意】煙と月とは、岸邊の沙を籠め、歌聲と燈火とは、酒家の前に在るので、この時、この景を眺めつつ、客は、なかなか眠りつかない。やつと蘇州の閶門を出たばかりであるのに、すでに南京なる秦淮に、夜、船を泊した樣な心持がするのは、如何したことか。

【餘論】この詩は、杜牧の一詩を翻用したのであるが、その小家數に落つるを免れざるは、聊か慊らぬ處である。

【字解】(一)煙月籠沙　杜牧の泊二秦淮一の詩に本づく、なほ次の項を見よ。(二)秦淮夜泊船　秦淮は南京に在つて、むかし、秦の始皇が王氣を斷つ爲に切り開いたといふので、名を得た處である。秦淮の附近は、風流花月の境地として知られ、唐の頃も、酒家が多くあつたと見える。杜牧が此に泊して作つた詩の全篇は、下の如くである。煙籠二寒水一月籠二沙、夜泊二秦淮一近二酒家一、商女不知亡國恨、隔江猶唱後庭花。

## 舟次丹陽驛

舟、丹陽驛に次す

沽酒來尋(一)水驛門。　酒を沽うて來り尋ぬ水驛の門、
鄰船燈火語黃昏。　鄰船の燈火、黃昏に語る。
今朝始覺離鄉遠。　今朝、始めて覺ゆ鄉を離るること遠きを、
身在丹陽郭外村。　身は在り丹陽郭外の村。

【題義】次は一寸止まることで、夜中、又その地を發したから、泊といはずして、特に次といつたのであらう。丹陽驛は、一統志に「丹陽縣雲陽驛」とある。

【詩意】酒を買つて、水驛の門を尋ね、わが船に歸つて來ると、折から、黃昏の頃、鄰の船では、すでに燈火をつけて、話し聲がして居る。今日、はじめて故鄉を遠く離れたといふ心持がするので、この身は、現に丹陽城外なる孤村に居るのである。

【字解】(一)水驛　水邊の村驛。(二)今朝　今日に同じ、必ずしも朝といふのではない。

## 正月十六日夜至京師觀燈　　正月十六日夜、京師に至りて燈を觀る

天街爭唱落梅歌。
絳闕珠燈萬樹羅。
莫笑游人來較晚。
春風還似昨宵多。

【題義】正月十五日は、即ち上元、これより、二晩つづいて燈を張ることが、むかしからの風俗である。この詩は、青邱が既に南京に到著せし後、十六日の夜の賑はしき景況を見て作つたのである。

【詩意】都大路に於ては、爭うて落梅の歌を唱へつつ、宮門の前には、美しき珠燈を吊した樹が、萬を以て數へる程も連つて居る。わが此に遊びに來りしことの較や遲きを笑ふにも及ばず、春風は、矢張、昨夜の通りで、その賑はしさにも、格別の變りはない。

【字解】〔一〕天街　即ち都大路。〔二〕落梅　歌曲の名。なほ其詳は、前に卷八、會二秋城南一の詩中に見ゆ。〔三〕絳闕　赤色の門、即ち宮門を指す。

## 夜聞雨聲、憶故園花

帝城春雨送春殘。
雨夜愁聽客枕寒。
莫入鄉園使花落。
一枝留待我歸看。

夜、雨聲を聞いて、故園の花を憶ふ

帝城の春雨、春殘を送る、
雨夜、愁へ聽いて客枕寒し。
鄉園に入つて花を落さしむる莫れ、
一枝留めて、わが歸り看るを待て。

【題義】説明に及ばぬ。

【詩意】帝城の春雨は、行く春を送つて、瀟瀟と降り注いで居る。夜、愁へて其聲を聽くと、客枕の轉た寒きを覺える位。雨よ、わが鄉園に降り入つて、花を落さぬ樣にし、せめては、一枝を留め置いて、やがて遠からず、わが歸鄉してから眺めるのを待たせて置いて貰ひたい。

【餘論】前半に於て、雨の複字が目につく。後の方は、或は、雨の字の誤ではなからうかとも思はれる。

## 早至闕下候朝

月明立傍御溝橋。
半啓宮門未放朝。
騶吏忽傳丞相至。

早く闕下に至りて朝を候す

月明、立つて傍ふ御溝の橋、
半ば宮門を啓いて、未だ朝を放たず。
騶吏忽ち傳ふ、丞相の至るを、

【字解】〔一〕御溝　宮城の周圍の溝。〔二〕放朝　朝會を罷りて解散する。〔三〕騶吏　騶馬の皇宮警視。〔四〕丞城　前に、卷十二、贈二

火城如晝曉寒銷。火城、晝の如く、曉寒銷ゆ。

可傘を備へ、燭を列して五六百炬に至るものあり、これを火城といふ。宰相將に至らむとすれば、衆皆燭を滅して之を避く」とある。しかし、宰相は元日冬至に限らず、いつでも多くの炬火を列して入朝すると見える。

【題義】この詩は、朝早く、宮門の下に至り、朝見の始まるのを待つて居る間に作つたのである。

【詩意】殘月の光明かなる時、御濠ばたに立つて、朝見を待つて居ると、宮門は、半ば開いて、まだ始まらぬ位だから、中中暮るまでにはならない。その内に、騎馬の皇宮警視が傳呼して、丞相が御出でに成つたといふので、ふり回つて見ると、炬火は城をなして、その明るきこと、晝の如く、曉の嚴しき寒さも、忽ち消えて仕舞つた樣な氣がした。

春日寄張祠部

春日、張祠部に寄す

(一)烏衣巷口燕來時。烏衣の巷口、燕來る時、
楊柳風多颭(二)酒旗。楊柳、風は多くして酒旗を颭かす。
遠客(三)金陵游伴少。遠客、金陵、游伴少く、
看花愁比去年遲。花を看る、愁づらくは去年に比して遲し。

【字解】【一】烏衣巷　南京に在る町の名。むかし、東晉の頃には、王謝の二名族が住んで居た。劉禹錫の詩に朱雀橋邊野草花、烏衣巷口夕陽斜、昔時王謝堂前燕、飛入尋常百姓家とある。【二】颭　うごかす、



閃めかす。【三】遠客　遠地より來りし客。【四】金陵　南京の別名。

【題義】說明に及ばぬ。但し、張祠部の名字等は不詳。

【詩意】むかし偲ばるる烏衣巷の邊に燕飛び來る春の頃、柳の枝には、春の風が吹き滿ちて、酒旗を動かし、游びに出かけるには最も善い時節である。しかし、予は、遠國から來た羇客であつて、この南京は、不慣なる爲に、游び仲間も少く、花見に出かけることも、去年よりも、ずつと遲くなつたのは、まことに、お愁かしい始末。そこで、如何です、御一處に願ふことは出來ますまいか。

左掖作

左掖の作

(一)小殿珠簾散柳絲。小殿の珠簾、柳絲を散ず、
(二)東宮初退講筵時。東宮、初めて講筵を退くの時。
不材未敢修封事。不材、未だ敢て封事を修せず、
把筆閒題應教詩。筆を把つて、閒に題す應教の詩。

【字解】【一】小殿　小じんまりした内殿。【二】東宮　太子の宮。【三】封事　天子に上る意見書。【四】應教　文選に沈休文の鍾山詩應西陽王教とあつて、諸王より命ぜられしを教といひ、ここでは、太子の命に依つて詩を作つたのである。

【題義】左掖、一に東掖といふ。漢代の宣政殿は、太子の居ます處で、天子正殿の左、卽ち東に在り

しが故に云ひ、爾後、これに依つて呼ぶことに成つて居る。この詩は、青邱が太子に侍講せし時に作つたのである。

【詩意】禁中、春漸く深く、小殿の玉の簾を柳の絲が靡き拂ふ風情、えも言はず、折から、東宮に於て、進講方に畢り、今しも講筵から退出した。もとより、不材の此身であるから、まだ天子に封事を上つたこともなく、唯だ筆を把つて、太子の命に依つて作つた詩を書きつける位の事で、やがて、差し出してお目にかける積りである。

## 雨中登天界西閣

雨中、天界の西閣に登る

青山樓閣楚江東。　青山の樓閣、楚江の東、
身在蒼茫晚色中。　身は蒼茫晚色の中に在り。
故國自遙難望見。　故國自ら遙にして、望み見難し、
不關春樹雨溟濛。　關せず、春樹の雨溟濛たるに。

【字解】【一】楚江　前に數ばゆ、揚子江。

【語義】説明に及ばぬ。天界は、寺の名、卽ち史局が開かれ、且つ局員の寄寓して居た處で、前に數ば見えて居た。

【詩意】青山に倚れる樓閣は、揚子江の東に當り、その西閣に登ると、この身、宛然として、蒼茫たる暮色の中に在る樣な心持がする。故郷は、もとより遙に隔つて、望み見ることも出來ないので、必ずしも、春樹が雨を帶びて、溟濛たるが爲めではない。

## 吳中親舊、遠寄新酒二首

吳中の親舊、遠く新酒を寄す　二首

雙壺遠寄碧香新。　雙壺遠く寄せて碧香新なり、
酒內情多易醉人。　酒內情多くして、人を醉はしめ易し。
上國豈無千日釀。　上國、豈に千日の釀なからむや、
獨憐此是故鄉春。　獨り憐む、此は是れ故郷の春。

【字解】【一】碧香　碧色にして香氣多きこと。【二】上國　帝都一帶の地。【三】千日釀　一度飲めば千日の間、醉つて醒めぬ酒。博物志に「劉玄石、中山の酒家に于て酒を酤ふ。酒家、千日の酒を與へ、その節度を言ふを忘る。歸つて、家に至つて大に醉ふ。而して、家人知らず、以て死せりと爲すなり、權に之を葬る。酒家、千日に滿つるを計り、乃ち玄石を憶うて、往いて之を視る。云ふ、亡ぶる三年、すでに葬ると。ここに于て、棺を開けば、醉、はじめて醒む。俗に云ふ、玄石、酒を飲み、一醉千日」とあり、搜神記に「狄希は中山の人なり、能く千日の酒を造り、これを飲めば、亦た千日醉ふ」とある。

【語義】説明に及ばぬ。

【詩意】二つの瓶に新酒を盛つて、遠く送つて寄越したが、色は碧に、匂ひは高く、その酒の内には懸なる情思をこめて、一段と人を醉はしめる。都には、千日も醉うて醒めぬといふ美酒が無い譯でもないが、これは、獨り故郷の春である處から、まことになつかしい。

爲念春來客思悲。　春の來るを念ふが爲に、客思悲しく、
欲教一醉對花枝。　一醉して、花枝に對せしめむと欲す。
那知飲量新來減。　那ぞ知らむ、飲量、新來減じ、
不似江亭看妓時。　似ず、江亭、妓を看るの時。

【詩意】春が來たと感づくと、旅中に在る身は、客思自然悲しく、一醉して、花枝に向つて見やうと思ふので、丁度善い時に酒が屆いた。しかも、測らざりき、近ごろ、酒量が頓と減つて、むかし、江亭に妓を看て、逸興飛ぶが如く、よよと參りし時とは、似ても付かぬ樣に成つて仕舞つた。

## 宿圓明寺、早起

圓明寺に宿し、早に起く

客起燈前夢尚迷。　客は起つて、燈前、夢、尚ほ迷ふ、
滿城殘月曉峰西。　滿城の殘月、曉峰の西。
應知野寺非山店。　應に知るべし、野寺の山店に非ざるを、
只聽鐘聲不聽雞。　只だ鐘聲を聽いて雞を聽かず。

【題義】圓明寺は、前に卷十二に見え、姑蘇志に「吳江縣二十三都に在り」と記してある。この詩は、圓明寺に一宿し、翌朝早く起きた時に作つたのである。

【詩意】客は起き出でたが、殘燈の前に坐して、夢、尚ほ迷ふ樣な心持がする。滿城の殘月は、はるかに曉峰の西に沈んで仕舞つた。もとより、野寺は山店と異にして、唯だ鐘の聲を聞くだけで、雞をば聞かない。

【餘論】後半は、溫庭筠の雞聲茅店月の一句に本づいて翻案したのである。なほ、舊本には、天界寺睡覺聞鐘の一首があつて、この詩といづれが先後なるかを知らず、そして、作者自ら其一だけを殘して置くことにしたのであらう。その詩は、卽ち左の通り、

夢覺春寒被尚淒。滿樓淮月女墻西。心驚官寺非田舍。只聽鐘聲不聽雞。

## 送郭省郎東歸二首

金陵兒女踏春陽。　金陵の兒女、春陽を踏み、
金陵客子正思鄉。　金陵の客子、正に鄉を思ふ。
一盃況復送春去。　一盃、況んや復た春を送つて去る、
目斷飛花江水長。　目は斷えて、飛花、江水長し。

【語義】説明に及ばぬ。省郎は、尚書省の屬僚。

【詩意】南京の兒女は、今しも、春の日影を踏んで游び戯るる折から、南京に客たる君は、故鄉を思うて居る。況んや、一盃、春の歸り去るを送れば、落花飛ぶはては、目も迥かに、江水は渺渺として盡きず、愈よ客思を傷ましめる。

【字解】【一】春陽　春の日光。

## 郭省郎の東歸を送る　二首

桃葉渡頭聞唱歌。　桃葉渡頭、唱歌を聞く、
孤帆欲發奈愁何。　孤帆發せむと欲して、愁を奈何。
君歸是我來時路。　君の歸るは、是れ我が來時の路、

【字解】【一】桃葉渡　桃葉は元と王獻之の妾の名、獻之の詩に因つて、渡の名ともなつて居るので、前に數ば見ゆ。



山水無多離思多。　山水多きなきも、離思多し。

【詩意】名だたる桃葉渡の邊に於て、唱歌の聲を聞きつつ、君は孤帆を挂げて去らむと欲し、しかも愁に堪へ兼ねて、しばし躊躇して居る。君の歸る時に通るは、卽ち我が此に來た時の路であつて、山水の眺は、さしたることもないが、わが離愁は、渺渺として、その間に滿ちて居る。

## 四月朔日、休沐雨中

送春風雨苦潺潺。　春を送るの風雨、苦だ潺潺、
得告今朝免綴班。　告を得て、今朝、綴班を免る。
臥聽鳩啼花落盡。　臥して鳩啼を聽いて、花、落ち盡し、
此身如在故園間。　この身、故園の間に在るが如し。

【語義】休沐は休暇、休暇には髪を洗ふから沐といふのである。

【詩意】春を送る風雨は、潺潺として鳴りも止まず、今日は休みだから、參内するに及ばぬといふ通知が來たので、大に助かつた。そこで、寢た儘、鳩の鳴くのを聽いて居ると、やがて、しとしとと

【字解】【一】苦　はなはだと訓すべし。【二】潺潺　降りそそぐ聲。【三】得告　通知を得た。【四】綴班　行列を整へる。

して、花も落ち盡したが、さながら故園の間に在る樣な氣がして、大に心を慰めた。

## 戴叔鸞入江夏山圖

戴叔鸞、江夏山に入るの圖

歸隱初辭薦辟章。　西風黃葉滿車箱。
青牛只識山中路。　不是無心向洛陽。

【字解】【一】歸隱　故山に歸つて隱居する。【二】薦辟章　推薦したり召し出したりする文書。【三】車箱　車の中、杜甫の詩に車箱入谷無二歸路一とある。【四】青牛　老子が青牛に乘つて函谷關に入つたといふ故事を暗用したのであらう。【五】洛陽　後漢時代の都。

【題義】戴叔鸞の事は、前に卷四、魏使君見示呂忠肅公舊贈詩二因賦の詩中に引いてあつたが、後漢書逸民傳に「戴良、字は叔鸞、汝南愼陽の人、孝廉に擧げられしが就かず、再び司空府に辟されしが到らず、州郡、これに迫る、因つて、逃れて江夏山中に入り、優游して仕へず」とある。この詩は、戴良が江夏山に入る處を畫いた圖に題したのである。

【詩意】戴叔鸞は、歸隱の志、深かりしにより、孝廉に擧げられたり、司空府に辟されたりしたが、いづれも、これを辭して、その文書を突き返して仕舞つた位。その江夏に向ふ路すがら、秋風は、黃ばんだ枯葉を吹いて、車中に滿ちたことであらう。その車を牽く青牛は、只だ山中の路を識別して居るので、洛陽の帝都に向ふに心なきのみではない。

## 送哲明府之新淦

哲明府の新淦に之くを送る

花落春衫試剪裁。　石頭城下楚帆開。
憑誰爲報清江吏。　麥雉鳴時縣令來。

【字解】【一】石頭城　南京の附近に在つて、むかし吳の孫權が築いた。【二】清江　一統志に「清江は、臨江府城の南に在り、本と贛水、吉安を經、ここに至つて清江となる」とある。【三】麥雉鳴時　前に卷二秋江曲の詩中に見えたが、魏書管輅傳に「典農の王弘直、雉雉あり、飛び來り、直が內鈴柱の頭に登る。輅をして卦を作さしむ。輅曰く、五月に到らば、必ず遷らむと。期に至つて、直、果して渤海太守となる」とある。

【題義】說明に及ばぬ。新淦は、題下の原注に「江西臨江府屬」とある。

【詩意】落花の頃、新に赴任するに就いて、春著の衣裳を試に裁つて縫ひ、やがて、舟に乘じて、石頭城下より出發した。麥畑に雉の鳴く頃、例の如く、縣令が著任されると、誰に因つて、清江の吏屬どもに知らさうか、何分、急なことで、客行定めて怱忙の事と御察し申す。

## 逆旅逢郷人

逆旅、郷人に逢ふ

客中皆念客中身。　客中、皆念ふ客中の身、
唯汝相逢意更親。　唯だ汝のみ相逢うて、意、更に親む。
不向燈前聽吳語。　燈前に向つて、吳語を聽かずんば、
何由知是故郷人。　何に由つてか、是れ故郷の人なるを知らむ。

【題義】逆旅は、旅人を迎へるといふ義、卽ち旅館・宿屋。この詩は、宿屋に於て故郷の人に遇つて作つたのである。

【詩意】客中に於ては、誰しも、自分が客中に居る身だと思つて、人に對しても狎狎しくはしないのに、唯だ君に逢つた時ばかり、更に親しい樣な氣がした。しかし、燈前に在つて、君が吳地のなまりで話し出すのを聞かなければ、いかで故郷の人たるを知るべき、或は其儘に打過ぎたかも知れない。

## 寄丁二侃

丁二侃に寄す

江頭斜日草初薫。　江頭の斜日、草、初めて薫す、
目斷歸鴻隔楚雲。　目は斷えて、歸鴻、楚雲を隔つ。
舊宅因君相近住。　舊宅、君が相近く住するに因つて、
每思家處獨思君。　每に家を思ふ處、獨り君を思ふ。

【題義】丁二侃は、前にも數ば見えて居た。二は排行、侃は其名である。

【詩意】江邊の夕日斜なる頃、草の初めて萌え出たのが見え、北に歸る雁の楚雲を隔てて棄ぶのは、目も迥かなるばかりで。故郷では、君が我が家の近くに住まはれたるに因り、每每、家を思ふ時、併せて、君を思ふ次第である。

## 題虞文靖公書所賦鶴巢詩後

虞文靖公の書、賦するところの鶴巢の詩後に題す

玉堂罷直(一)鬢如絲。　玉堂、直を罷めて、鬢、絲の如く、
華蓋岡頭(二)戴笠(三)時。　華蓋岡頭、笠を戴くの時。
丁令(四)去來滄海變。　丁令去つて來、滄海變じ、
人間零落鶴巢詩。　人間零落す鶴巢の詩。

【字解】【一】玉堂　翰林をいふ。【二】罷直　當直を罷める、卽ち出仕せぬ樣になる。【三】華蓋岡　撫州志に「山は崇仁縣西に在り、形、華蓋の如し。宋末氣を望むもの言ふ、華蓋臨川、二山の間に當る」異人を產

すべしと。すでにして、吳澄出づ。文靖は、崇仁の人、業を草廬（卽ち澄）に受く」とある。【四】 戴笠　無官の人の散歩などする樣をいふ。李白が杜甫に贈つた詩に、飯顆山頭逢二杜甫一、頭戴二笠子一日卓午とある。又王禕の虞先生戴笠圖の贊に、謂文靖公、青城山樵、纖三百年之學術、擅二一代之文豪一とある。【五】 丁令　卽ち丁令威、前に靴ぼ見えたが、搜神記に「丁令威は、遼東の人、漢初、師に隨つて仙道を學び得、分身、意の欲するところに任かす。かつて、暫く歸り、化して白鶴となり、郡城門の華表柱頭に集まる。時に少年あり、弓を擧げて、これを射むと欲す。鶴、乃ち飛び、空中に徘徊して言ふ、云云」とある。【六】 滄海變　神仙傳に「麻姑、王方平に謂つて曰く、吾、接待せしより以來、東海の三たび桑田となるを見る、さきに、蓬萊に到りしに、水、又往昔會する時より淺く、略ぼ平なり、豈に蒼に復た陵陸と爲らむとするか。方平笑つて曰く、聖人皆言ふ、海中塵を揚ぐるなり」とある。

【語義】 虞文靖公は虞集、元史の本傳に「虞集、字は伯生、蜀郡の人、宋の丞相允文五世の孫なり。父汲に隨つて、臨川に居る。天性孝友、弘才博學、奎章閣學士に累遷し、日ごとに經史中の心德治道に切なるものを取つて、經筵に陳進す。凡そ顧問を承くれば、必ず事に隨つて規諫す。而して、一時の大典冊、咸な其手に出づ。その人物を論薦する、必ず器識を先にす。平生、文萬篇を爲る、道園學古錄あり、世に行はる、卒して仁壽公を贈り、文靖と謚す」とある。この詩は、虞集が自分で書いた鶴巢の詩の後に題したのである。但し、その詩は、虞集の全集たる學古錄に載せてないから、どんなものか分からぬ。

【詩意】 虞集は、奎章閣學士として毎に玉堂に出仕して居たが、老年になると辭職して故郷に歸り、笠を戴いて、華蓋岡頭を逍遙し、その時、この詩を作つたのであらう。さはれ、丁令威の鶴、一たび去つてより後、滄海變じて桑田となる位であるから、この鶴巢の詩も、人間に零落して、さらでも無き人の所藏に歸して居る。

客中憶二女

毎憶門前兩候歸。
客中長夜夢魂飛。
料應此際猶依母。
燈下看縫寄我衣。

客中、二女を憶ふ

毎に憶ふ、門前兩ながら歸るを候するを、
客中長夜、夢魂飛ぶ。
料るに、應に此際猶ほ母に依り、
燈下、我に寄する衣を縫ふを看るなるべし。

【字解】 【一】 兩候歸　兩は兩人といふ義、候門は陶淵明の歸去來辭に繼子候レ門とあるに本づく。【二】 依母　母に倚り添ふ。

【語義】 說明に及ばぬ。

【詩意】 娘どもは、二人相竝び、わが歸るを待つて、門に伺つて居るだらうと、毎毎憶ひ出すを禁ぜず、客中、長き夜の夢に、魂は故郷に向つて飛ぶのである。料るに、かかる折しも、娘どもは、母に倚り添ひ、燈火の下で、母が予に寄する衣を縫つて居るのを、ぢつと看て居るであらう。

## 晩晴遠眺

晩晴遠眺

(一)楚天無物不堪詩。　楚天、物として詩に堪へざるはなし、
登眺唯愁動遠思。　登眺、唯だ愁ふ、遠思を動かすを。
秋樹江山人別後。　秋樹、江山人別るるの後、
夕陽樓閣雨晴時。　夕陽、樓閣雨晴るるの時。

【題義】説明に及ばぬ。

【詩意】大江附近は、風景殊に宜しく、楚天、物として詩に入るに堪へぬものはなけれども、樓に登つて遠望すれば、客思を動かすを愁ふるだけである。人に別れし後、秋樹黄ばみて江山ほの暗き折から、雨晴れて夕陽の樓閣が爛然として見ゆる時など、その風情、えも言はれぬ程である。

【字解】(一)楚天　楚は大江附近。

## 寄徐記室

徐記室に寄す

惆悵江東日暮雲。　惆悵、江東日暮の雲、
我來君去苦離羣。　我來り、君去つて、離羣に苦む。
不知此日君思我。　知らず、この日、君、我を思ふ、
還似當時我憶君。　還た當時、我、君を憶ふに似たり。

【題義】徐記室は卽ち徐賁、題下の原注に「徐、久しく京師に客たり、予、至れば、已に東還す」とあつて、青邱が折角南京に往つた處が、入れ違ひに成つて、逢へなかつたから、この詩を作つて寄せたのである。

【詩意】江東日暮の雲を顧みて、惆悵の思に堪へず、われ偶ま此に來りしに、君、すでに去つて、相見るを得ず、離羣の身を嘆ずるばかり。知らず、今日、君も我を思はるるや否や、もし思はれるならば、さきに予が其地に在つて君を憶うたと似て居るであらう。

【餘論】江東日暮雲の五字は、杜甫が李白に寄せた詩の中の句であつて、これを切り出して運旋したのは、もとより、意味あることで、二人の交情を以て、當年の李杜に比した積りであらう。

## 寄家書

家書を寄す

底事鄉書累自修。　底事ぞ、鄉書、累りに自ら修す、
路長唯恐有(二)沈浮。　路長くして唯だ恐る沈浮あるを。

【字解】(一)累自修　打つづけ自分で手紙を書く。(二)沈浮　途中の異變。

還憂得到家添憶。　還た憂ふ、家に到つて憶を添ふるを得るを、
不敢多言客裏愁。　敢て多く客裏の愁を言はず。

【語義】説明に及ばぬ。題下の原注に「時に越城に客たり」とあつて、卽ち青邱が吳越に游んだ時の作である。

【詩意】打つづけて、家に遣る手紙を自分で書いたのは、如何なる故か、何分遠くして、途中に異變がありはせぬかと、聊か心配したからである。しかし、家に到著せし後、家人をして、わが方を憶はしめるのも、本意でないから、客中の愁に就いては、あまり多く書かずに置いた。

期袁卿見過、因出失値、寄詩謝之

袁卿の過ぎらるるを期し、出でしに因つて値ふことを失す、詩を寄せて之を謝す

非關遠出負幽期。　遠く出でて、幽期に負くに關するに非ず、
自是江邊枉棹遲。　自ら是れ、江邊、棹を枉ぐること遲し。
誰道空廻君恨切。　誰か道ふ、空しく廻つて君の恨切なりと、
未應如我到家時。　未だ應に我が家に到る時の如くなるべからず。

【語義】袁卿の卿は、親んで呼ぶ尊稱。その人の名字は不詳。この詩は、袁卿が來訪するといふ約束があつた處、外出した爲に遇へなかつたから、これを作つて、謝を致したのである。

【詩意】わが遠く外出して折角の幽期に負いた爲めではなく、君が今少し早く來て吳れれば善かつたので、つまり、江邊に棹を枉げられたことが遲かつた。君は空しく歸り去つて、殊に遺憾であつたと誰が云ふか、それよりも、予が家に歸つて、その事を聞いた時の方が、はるかに甚しかつた。

宿蟾公房

蟾公の房に宿す

一禽不鳴深樹煙。　一禽鳴かず、深樹の煙、
明月下照高僧禪。　明月、下に照らす高僧の禪。
獨開西閣詠清夜。　獨り西閣を開いて、清夜に詠ず、
秋河欲墮山蒼然。　秋河、墮ちむと欲して山蒼然。

【語義】題下の原注に「虎邱に在り」と見ゆ、但し蟾公の本名等は不詳。

【詩意】しげれる木木には、煙立ちこめて、夜色寥寥、一禽鳴かず、月の光、隈もなく、下に向つて坐禪せる老僧を照らして居る。君は、獨り西閣を開いて、清夜の景色を吟賞せられ、やがて、銀河地

【字解】【一】秋河　銀河に同じ。
【二】蒼然　黯くして色なき貌。

に落ちむとし、山色蒼然たる曉の頃に及んだことと思はれる。

【餘論】この首は、わざと普通の平仄を破つた變體である。

## 陌上見梅

陌上、梅を見る

陌頭一樹帶風沙。　陌頭の一樹、風沙を帶ぶ、
零落寒香日欲斜。　零落寒香、日、斜ならむと欲す。
車馬紛紛誰暇看。　車馬紛紛、誰か看るに暇あらむ、
當年只合種山家。　當年只だ合に山家に種うべし。

【題義】この詩は、町中に在る梅を見て作つたのである。

【詩意】町中に立てる一株の梅は、沙吹く風を帶び、寒香零落して、日も斜ならむとして居る。車馬紛紛として、頻りに通過すれども、誰とて、これを看るに暇なく、この位ならば、その初、山家に種るたらば善かつたと思はれた。

## 東歸至楓橋

東歸、楓橋に至る

故人當日送登畿。　故人、當日、登畿を送る、
此地停舟醉落暉。　この地、舟を停めて落暉に醉ふ。
慙愧臨河舊攀柳。　慙愧す、河に臨む舊攀の柳、
尚留青眼看人歸。　尚ほ青眼を留めて、人の歸るを看る。

【題義】説明に及ばぬ。楓橋は、前に數ばば見えて居た。以て柳の新しい葉に喩へたので、劉元素の柳の詩に青眼相看我可知とある。

【詩意】さきの年、朋友どもは、わが上京を送つて、此まで來りしに因り、舟を停めて、夕陽の中に醉つたことがある。今日、ここに來て見ると、その攀ぢた河邊の柳は、尚ほ青眼を留めて、わが歸るのを見る樣で、まことに、なつかしく感じた。

【字解】〔一〕登畿　畿は王畿、都を中心として千里四方。王畿に向ふといへば、上京に同じ。〔二〕青眼　晉書阮籍傳に「籍、善く青白眼を爲し、禮俗の士を見れば、白眼を以て之を待つ」とある。その青眼を

## 江行

家家漁網映迴橋。　家家の漁網、廻橋に映ず、
春水初生沒樹腰。　春水、初めて生じて樹腰を沒す。
客路江南煙雨裏。　客路江南、煙雨の裏、

【字解】〔一〕迴橋　迂廻して側に在る橋。

綠蕪芳草恨迢迢。　綠蕪芳草、恨迢迢。

【題義】説明に及ばぬ。

【詩意】家ごとに、網を日に曝らし、それが、迂廻して側に在る橋に映じ、春の水は、初めて生じて、隄の木の腰をも沒する位。行く手の江南は、煙れる雨の中に隱見し、芳草綠方に茂り、客恨迢迢としてはてもない。

## 戲和徐七見寄、臥聞鄰槽酒聲之作

戲に徐七寄せらるる、臥して鄰槽酒聲を聞くの作に和す

春瀉鄰槽入夜聞。　春は鄰槽に瀉いで、夜に入つて聞こゆ。
遠疑泉響隔松雲。　遠く疑ふ、泉響の松雲を隔つかと。
題詩爲問醒眠客。　詩を題して、爲に問ふ醒眠の客、
幾滴還能醉得君。　幾滴か還た能く君を醉はし得む。

【字解】〔一〕鄰槽　鄰家の酒槽。

【題義】徐七は例の徐賁。鄰槽酒聲とは、鄰家の酒槽の醱酵する聲。徐賁が、臥して鄰槽の酒聲を聞くといふ詩を寄せられたから、戲に之に和して作つたのである。

【詩意】春は鄰槽に瀉いで醱酵し、夜になると、その聲が、はッきり聞こえ、泉響が松雲を隔つるかと疑ふばかり。詩を題し畢りし後、酒を飲まずして眠る人に問ふが、その酒の幾滴が快く君を醉はし得るか、如何に酒の嫌ひな人でも、この聲を聞くと、流石に飲みたく成るに相違ないと思はれる。

## 見燕至

燕の至るを見る

初來如報社前春。　初めて來つて社前の春を報ずるが如く、
好宿茅簷伴客身。　好し茅簷に宿して、客身を伴ふ。
莫入江南舊庭院。　江南の舊庭院に入る莫れ、
杏花風雨總無人。　杏花風雨、すべて人なし。

【題義】説明に及ばぬ。

【詩意】燕の初めて飛び來るや、社日の前なる春を報ずるが如く、茅ぶきの檐端に宿し、孤客と相伴うて、頗る風情がある。江南の舊庭院には入らぬが宜しく、騷亂の後、到る處、淒涼殊に甚しく、杏花には風雨が吹き暴れて、全く人なき有樣である。

## 背面美人圖

背面美人の圖

欲呼回首不知名。　呼んで首を回さしめむと欲するも、名を知らず、
背立東風幾許情。　東風に背立す幾許の情。
莫道畫師元不見。　道ふ莫れ、畫師、元と見ずと、
傾城雖見畫難成。　傾城見ると雖も、畫成り難し。

【題義】説明に及ばぬ。

【詩意】呼びかけて此方を向かせやうと思ふが、名を知らぬから仕方がないので、春風の吹く處に後向いて立つて居る處は、極めて情思がある。畫師も、元と其顏を見ないから、かくの如く畫いたといふな、人の城を傾くるに足る其面貌は、たとひ、見た處で、到底畫くことは出來ないので、畫師に在つては、拙を藏する一手段に外ならぬことと思はれる。

【字解】【一】傾城　美人をいふ、前に數ば見ゆ。李延年の詩に、北方有二佳人一、絕世而獨立、一顧傾二人城一、再顧傾二人國一とある。



## 對梨花

梨花に對す

素香寂寞野亭空。　素香寂寞、野亭空しく、
不似秋千院落中。　似ず秋千院落の中。

【字解】【一】素香　白き花の匂。【二】秋千　前に見ゆ、ブランコ、東坡の詩に鞦韆院落夜沈沈とある。

臥對一枝愁病酒。　臥して一枝に對して、酒を病むを愁ふ、
清明今日雨兼風。　清明今日、雨と風と。

【題義】説明に及ばぬ。

【詩意】白き花の匂も消えて、野亭人なく、かのブランコの懸れる院落の中の賑はしかりしに似もやらず、今日、臥して、その殘れる一枝に對し、二日醉の氣味で籠つて居るが、折から、清明に際し、雨と風とが吹きすさんで居る。

【字解】【二】清明　前に數ば見ゆ。寒食の前二日。

## 和楊余諸君在謫中憶往年西園聽歌

楊余の諸君、謫中に在りて、往年西園歌を聽くを憶ふに和す

花落名園罷醉游。　花落ちて、名園、醉游を罷む、
故人無復舊風流。　故人、復た舊風流なし。
異鄕莫歎無歌聽。　異鄕、歎ずる莫れ、歌の聽くなきを、
若使聞歌意更愁。　もし、歌を聞かしむれば、意、更に愁へむ。

【題義】楊は楊基、余は余堯臣、二人、ともに、淮張に仕官せしを以て、明の太祖から罰せられて、

遠地に遷謫せられ、往年西園に於て歌を聽きしを憶ふと題する詩を作つて寄せられたから、これに和して作つたのである。

【詩意】花落ちたる名園に於ては、醉つて游ぶことを罷め、わが朋友どもは、今しも、當日の風流もない。諸君は、異郷に在つて、歌を聞かぬことを嘆息せずもあれ、もし歌を聞かせたならば、一しほ愁に堪へぬことであらう。

## 重過南寺、尋悟公、不値　重ねて南寺を過ぎて悟公を尋ねしが、値はず

我是鈞天夢覺人。　われは是れ鈞天夢覺むるの人、
憶來松下似前身。　憶ふ、松下に來つて前身を似せしを。
老僧何去袈裟在。　老僧、何にか去る、袈裟在り、
落葉斜陽滿室塵。　落葉斜陽、滿室の塵。

【字解】〔一〕鈞天夢覺　鈞天は中央の天、前に卷七、晝眠の詩中にも引いたが、史記趙世家に「趙簡子、五日人を知らず、大夫皆懼る。居ること二日半、簡子、寤めて曰く、われ帝の所に之き、百神と鈞天に游び、廣樂九奏萬舞、三代の樂に類せず」とある。

【題義】説明に及ばぬ。但し、南寺も、悟公も、詳細の事は分からぬ。

【詩意】われは、鈞天の夢覺め、仙を欲して志を遂げざりしもので、かつて、松下に來つて、これは我が前身だといつて、示したこともあつた位、老僧は、よく之を知つて居る。その老僧は、何處へ往つたか、袈裟だけ脱ぎ棄ててあつて、夕日の中に落葉散り布き、室内には、塵が滿ちて、掃除もせずにある。

【餘論】承句は、聊か晦澁に失し、どうも、意味がはつきりしない。

## 過流通院、二首　流通院を過ぐ　二首

僧懶開門見客遲。　僧は門を開くに懶く、客を見ること遲し、
空林流水日斜時。　空林流水、日斜なるの時。
欲留詩句知曾過。　詩句を留めて、曾過を知らしめむと欲す、
我後來看竟是誰。　わが後に來り看るは、竟に是れ誰ぞ。

【題義】流通院は、蘇州府志に「院は、長洲十九都に在り」と記してある。

【詩意】僧は門を開くこと懶く、客が來ても、引見することが遲く、空林流水、折から、夕日は斜になつて居る。ここに、詩句を留めて、我が曾て過ぎし記念と致さうと思ふが、我が後に來て、この詩を看るものは、畢竟、誰であらう。

橘柚林中薜荔垣。　橘柚林中、薜荔の垣、
幽尋幾度入秋園。　幽尋、幾度か、秋園に入る。
雖然老衲無聞見。　然かく、老衲、聞見なしと雖も、
猶勝相逢俗客言。　猶ほ俗客に相逢うて言ふに勝る。

【詩意】橘柚の林の中に、蔦かづらの垣を繞らした一構の僧菴があつて、われは、幽處を尋ねて、幾たびも、秋の園に入つた。菴に住む老僧は、格別の人でもなく、聞見を益する譯でもないが、それでも、俗客に逢つて、下らぬ話をするには勝つて居る。

【字解】【一】薜荔　蔦かづら、柳宗元の詩に、衆雨斜侵薜荔牆とある。
【二】幽尋　幽處を尋ねる。
【三】老衲　老僧に同じ。

## 聞人唱吳歌

楚人不解聽吳歌。　楚人、吳歌を聽くを解せず、
我獨燈前感慨多。　われ獨り燈前感慨多し。
記得通波亭下路。　記し得たり、通波亭下の路、
畫船歸去雨鳴荷。　畫船歸り去つて、雨、荷を鳴らせしを。

【字解】【一】通波亭　姑蘇志に「長洲の舊傳館、凡そ八、全吳・通波・龍門・臨頓・江楓・烏鵲・昇羽・昇月、宋に至つて猶ほ存す」とあつて、これは、官設の驛亭と見える。



【題義】說明に及ばぬ。
【詩意】楚人は、吳歌を聽いても分からぬが、われは、固より吳人であるから、燈前に於て、獨り感慨の多きに堪へられぬ。かつて、通波亭下の路に於て、綺麗な游山舟が歸り去りし時、歌聲漸く遠く、やがて、雨が蓮の葉を打つて響いたことを記憶して居る。

## 雨中過山

春雲晻靄澗奔渾。　雨中、山を過ぐ
風雨行人過一村。　春雲晻靄、澗奔つて渾る、
不似家山深竹裏。　風雨、行人、一村を過ぐ。
乳鳩啼午未開門。　似ず、家山深竹の裏、
　　乳鳩、午に啼いて、未だ門を開かず。

【題義】一本に、題を雨中過雞籠山に作り、金檀の按に「山は天平山東に在り」と記してある。
【詩意】春の雲は、もやもやとして、澗水は奔つて濁り、行人は、風雨の中をたどつて、村を過ぎ行くのである。わが故郷の山邊では、深竹叢をなし、親鳩が眞晝に啼く頃、村家では、まだ門を開かないが、それとは全く似てもつかぬ景色である。

## 讀史、二十二首　讀史　二十二首

### 晏嬰

一裘身著久經年。一裘、身に著けて、久しく年を經たり、
祿米分炊幾戶煙。祿米、分つて炊がしむ幾戶の煙。
盡說大夫能養士。盡く說く、大夫、能く士を養ふを、
却於尼叟惜封田。却つて、尼叟に於て封田を惜む。

【題義】史記管晏列傳に「晏平仲嬰は、萊の夷維の人なり、齊の靈公・莊公・景公に事へ、節儉力行を以て齊に重んぜられ、三世、名を諸侯に顯はす」とある。

【詩意】晏平仲は、一狐裘を身に著けた儘、三十年の久しきを經、そして、君より頂戴する祿米を分けてやり、火を擧げて米を炊ぐもの、幾百家といふ位。かくの如く、節儉力行して、士を養ふといふ評判が盛な位なのに、却つて、孔子に對して封田を惜み、これをして、他國に之かしめたのは、まことに怪訝の至である。

【字解】【一】一裘　禮記の檀弓に「晏子、一狐裘、三十年」とある。【二】祿米分炊　說苑に「晏子曰く、臣、君の賜を以て、父の黨、車に乘らざるものなく、母の黨、衣食に足らざるものなく、妻の黨、凍餒するものなく、君の賜、此に至る」とある。【三】大夫　晏嬰を指す。【四】尼叟　孔子、名は丘、字は仲尼。



### 商鞅

徒誇闞戟衞華軒。徒に誇る、闞戟、華軒を衞るを、
渭水何能洗衆寃。渭水、何ぞ能く衆寃を洗はむ。
想到出亡無舍日。想うて到る、出亡、舍するなきの日、
應思不用趙良言。應に趙良の言を用ひざりしを思ふなるべし

【題義】史記商君列傳に「商君といふもの、名は鞅、姓は公孫氏、少にして刑名の學を好み、魏を去て囚を論ず、渭水、盡く赤し」とある。【四】出亡無舍　前に卷三、寓感の七に引いたが、商君列傳に「秦の孝公卒す、太子立つ、公子虔の徒、商君反せむと欲するを告ぐ。吏を發して、商君を捕へむとす。商君、亡げて關下に至り、客舍に舍らむと欲す。舍人、その是れ商君なるを知らざるなり。曰く、商君の法、人の驗なきものを舍すれば、これに坐す。商君、喟然として歎じて曰く、嗟乎、法を爲すの弊、一に此に至るや、と。秦、兵を發して之を攻殺す」とある。【五】趙良言　商君列傳に「趙良、商君に說いて曰く、君の危きこと、朝露の若し。尙ほ將に年を延ばし、壽を益さむと欲するか、すなはち、何ぞ十五都を歸し、園に鄙に還がざるや。秦王に勸めて、巖穴の士を擧ぐし、老を養ひ、孤を存し、父兄を敬し、有功を序し、有德を尊べば、以て少しく安かるべし。君、なほ將に商於の富を貪り、秦國の政を寵し、百姓の怨を奢へむとす。秦王、一旦賓客を捐てて朝に立たざれば、秦國の君を收むる所以のもの、豈に其れ微ならむや。亡ぶること、翹足して待つべし、と。商君從はず」とある。

【字解】【一】闞戟　一方に枝の出たる矛。史記商君列傳に「矛を持して、闞戟を操るもの、車に旁うて趨る」とある。【二】華軒　立派な車。【三】渭水　商君列傳に「商君法を用ふる監酷。かつて、渭に臨んで囚を論ず、渭水、盡く赤し」とある。

つて秦に相とし、商君に封せらる」とある。

【詩意】商君は、立身して、枝の出て居る矛を以て、立派な車を護衛される身分と成つたことを自負して居たが、渭水の流も、いかで衆人の寃恨を洗ひ去るを得べき。その餘り苛酷なるが爲に、百姓の怨府と成つたのは、まことに致し方の無いことである。察するところ、その末路、出奔して、宿をかす人もなく、弱り切つた折から、當初、趙良の忠言を用ひなかつたことを定めて悔やしく思つたであらう。

## 儀秦　　儀秦

二子全操七國權。
朝談從合暮衡連。
天如早爲生民計。
各與城南二頃田。

【字解】【一】二子　蘇秦と張儀。【二】七國　趙魏韓齊燕楚、謂はゆる六國に秦を合せて云ふ。【三】朝談從合暮衡連　從合衡連は、合從連衡を敍意に倒用したので、論衡に「蘇秦張儀、從横、これを鬼谷先生に習ふ」とあり、又呂氏春秋離謂篇の注に「關東六國を從と爲し、關西を横となす」とあり「六を以て一を治むるを縱となし、一を以て六を離するを横となす」とある。蘇秦は、六國の合從を策し、張儀は、反對に連衡を說いたのである。【四】城南二頃田　史記蘇秦列傳に其言を記して「我をして、洛陽負郭の田二頃を有せしむれば、豈に能く六國の相印を佩びむや」とある。負郭とは、城壁を負ふ、即ち城に接近するといふ義。なほ、これは蘇秦の事であるが、張儀も、その初、もとより窮して居たから、連帶して言ひ、つまり、生活に差支ないといふ義。

【題義】蘇秦は東周洛陽の人、張儀は魏人、二人、ともに鬼谷先生に學び、もとは同門であつたので、その傳は、史記の本傳に見えて居るから、ここには、省略することにする。

【詩意】蘇秦張儀の二人は、全く七國の權を手中に操る樣になり、朝に蘇秦が合從を說くかと思へば、暮に張儀が連衡を談じて、天下ともに適從するところを知らず、騷擾は却つて劇しく成つて來た。天、もし早く生民安樂の計を爲さむとならば、この二人に各城南二頃の田を與へ、生活に差支ない樣にして遣れば善かつたので、さうすれば、苦しまざれに、あんな事を仕出來すことも無かつたであらう。

## 藺相如　　藺相如

危計難成五步間。
置君虎口幸全還。
世人莫笑三閭懦。
不勸懷王入武關。

危計成り難し五步の間、
君を虎口に置いて、幸に全うして還る。
世人笑ふ莫れ三閭の懦、
懷王を勸めて武關に入らしめず。

【字解】【一】五步間　題義の項を見よ。【二】虎口　戰國策に「今、秦は四塞の國、たとへば虎口の如し。而して、君之に入らば、臣、君の出づるところを知らず」とある。【三】三閭　史記屈原列傳に「屈原、江濱

に至る、漁父見て之に問うて曰く、子は三閭大夫に非ずや、何が故に此に至る」とあり、離騒の序に「三閭の職は、王族三姓を掌る、その譜牒を序し、その賢良を率ゐて、以て國士を厲ますなり」とある。【四】 不動懷王入武關　屈原列傳に「時に秦の昭王、楚と婚し、懷王と會せむと欲す。懷王行かむと欲す、屈平曰く、秦は虎狼の國、信ずべからず、行くなきに如かず、と。懷王の稚子子蘭、王に勸めて行かしむ、奈何ぞ秦の歡を絶つ、と。懷王、卒に行いて武關に入る。秦、兵を伏せて、その後を絶つ、因つて、懷王を留めて、以て地を割かむことを求む」とある。

【題義】 史記藺相如傳に「藺相如は、趙人なり。趙の惠文王の時、秦王、使者をして趙王に告げしめ、王と好をなし、西河の外、澠池に會せむと欲す。趙王、秦を畏れて行くなからむを欲す、廉頗・藺相如、計つて曰く、王行かざれば、趙の弱且つ怯なるを示すなり、と。遂に秦王と澠池に會す。秦王、酒を飲むこと酣にして曰く、寡人、竊に趙王の音を好むを聞く、請ふ、瑟を奏せよ、と。趙王、瑟を鼓す。秦の御史、前んで書して曰く、某年月日、秦王、趙王と會飲し、趙王をして瑟を鼓せしむ、と。藺相如、前んで曰く、趙王、竊に秦王が善く秦聲を爲すを聞く、請ふ、盆缶を奉じて、以て相娛樂せむ、と。秦王怒つて許さず、ここに于て、相如、前んで缶を進め、因つて跪いて、秦王に請ふ。秦王敢て缶を擊たず。相如曰く、五歩の内、相如、請ふ頸血を以て大王に灑ぐを得む、と。左右、相如を刃せむと欲す。相如、目を張つて之を叱す、左右皆靡く。ここに于て、秦王、懌ばず、爲に一たび缶を擊つ。相如、顧みて趙の御史を召し、書して曰く、某年月日、秦王、趙王の爲に缶を擊つと。秦の羣臣曰く、請ふ、趙の十五城を以て秦王の壽を爲せ、と。藺相如亦た曰く、請ふ、秦の咸陽を以て趙王の壽を爲せ、と。秦王、酒を竟るまで、終に趙に加ふる能はず。趙、亦た盛に兵を設けて、以て秦を待つ、秦、敢て動かず。すでに罷めて國に歸る、相如の功大なるを以て、拜して上卿と爲す」とある。

【詩意】 五歩の間に於て頸血を大王に灑ぐといふ危計は、一寸出來難く、一旦、君を虎口の危きに置きながら、遂に其身を全うして還つたのは、まことに、幸なことであつた。世人は、かの屈原が懷王に武關に入ることを勸めず、これを諫止したのは、聰病であるといつて笑ふが、決して、さういふ譯ではなく、藺相如のは、全く僥倖であるから、これを以て、他を律することは出來ない。

## 平原君　　平原君

朝歌長夜館娃春。　朝歌の長夜、館娃の春、
總爲妖姬戮諫臣。　すべて、妖姬の爲に諫臣を戮す。
何事邯鄲貴公子。　何事ぞ、邯鄲の貴公子、
能因壁者殺佳人。　能く壁者に因つて佳人を殺す。

嚴山上に在り、前は姑蘇臺に臨む。吳人、美人を謂うて娃となす、蓋し西施に因つて名を得たり」とある。【四】 戮諫臣　通鑑に「紂、有蘇氏を伐つ。有蘇氏、妲己を以て女ほす。妲己、寵あり、その言、是れ從ふ。十有一祀、九侯を醢にす。鄂侯諫む、これを脯にし、

【字解】【一】 朝歌　一統志に、「殷紂の都するところ、朝歌の地、今の衛輝府」とある。【二】 長夜　通鑑に「紂、長夜の飲を爲す」とある。【三】 館娃　前に數ば見ゆ、吳王夫差の離宮。蘇州府志に「館娃宮は、靈

西伯を羑里に囚ふ。三十有二祀、封益す無道。微子諫むれども聴かず、これを去る、箕子諫めて囚へらる、比干固く爭ふ、これを殺す」とあり、呉越春秋に「呉王、子胥の怨恨を聞くや、乃ち人をして屬鏤の劍を賜はしむ。子胥、劍を受け、徒跣堂を下り、中庭に天を仰いで怨を呼んで曰く、吾、今日、死せば、呉宮墟となり、庭に蓬草を生じ、越人、汝の社稷を掘る、安んぞ我を忘れむや」とある。【五】 邯鄲貴公子　邯鄲は趙の都、平原君を云ふ。【六】 能因璧者殺佳人　前に卷十五、過二故將軍第一の詩中にも引いたが、史記平原君傳に「家の樓、民家に臨む、民に璧者あり、梁躚として、行いて汲む。平原君の美人、樓上より見て、大に之を笑ふ。明日、璧者、平原君に至り、請うて曰く、臣、君が士を貴んで妾を賤むを聞くなり。臣、願はくは、臣を笑ふ者の頭を得む、と。平原君、笑うて、美人を殺さず。歳餘、賓客稍や引いて去る。怪んで、これを問ふ。一人曰く、君、色を愛し、士を賤む、と。ここに於て、平原君、璧者を笑ふ美人の頭を斬り、自ら門に造つて之を謝す、その後、賓客復た來る」とある。

【題義】 史記平原君列傳に「平原君趙勝は、趙の諸公子なり、賓客を喜び、賓客、蓋し至るもの數千人」とある。

【詩意】 むかし、紂は、朝歌に都して長夜の飲を爲し、呉王夫差は、館娃宮の春に醉ひ、二人とも、妲己といひ、西施といふ妖姫の爲に、忠諫せる臣下を殺して仕舞つた。しかるに、邯鄲の貴公子たる平原君が、反對に、璧者の爲に佳人を殺したのは何故か、一寸他に其例を見ざることである。

## 范睢

紛紛傾奪苦多謀。

【字解】【一】 傾奪　人を傾けて

得勢還懷失勢憂。
丞相不須嗔蔡澤。
此時當問老穰侯。

勢を得れば還た懷ひ、勢を失へば憂ふ。
丞相須ひず、蔡澤を嗔るを、
この時、當に問ふべし老穰侯。

其權を奪ふ。【二】 還懷　又しても權勢を懷ふ。【三】 丞相　范睢を指す。【四】 蔡澤　題義の項に見ゆ。【五】 穰侯　秦の昭王の母の弟で、范睢の前に丞相たりし人。

【題義】 史記范睢列傳に「范睢、秦に至り、日に益す親む。因つて間を請うて、說いて曰く、臣、山東に居る時、齊の田文あるを聞くなり、王あるを聞かざるなり、秦の太后・穰侯・華陽・高陵・涇陽あるを聞くなり、王あるを聞かざるなり、と。秦王、ここに於て、太后を廢し、穰侯・高陵・涇陽君を關外に逐ひ、乃ち范睢を拜して相となし、封ずるに應を以てし、應侯と號す。すでにして、應侯、鄭安平に任じ、將として趙を擊たしむ、趙に困められ、兵二萬人を以て趙に降る。王稽、河東守となり、諸侯に通じ、法に坐して誅せらる。應侯、懼れて、出づるところを知らず。燕人蔡澤、乃ち西して秦に入り、將に昭王に見えむとし、人をして、相位を奪ふと宣言せしめ、以て應侯を感怒す。應侯聞いて、人をして蔡澤を召さしむ。蔡澤、入つて應侯を揖す、應侯、もとより快とせず、これを見るに及びて、又倨る。應侯、因つて之を讓めて曰く、子、かつて我に代つて秦に相たらむことを宣言すと、寧ろ之あるか。對へて曰く、然り。應侯曰く、請ふ、その說を聞かむ。蔡澤曰く、吁、君何ぞ見るの晚きや。夫れ四時の序、功を成すものは去る。君の功極まれり、これを以てして退かざれば、商君・白公・呉起

大夫種、これなり。君、何ぞ此時を以て相印を歸し、賢者に讓つて之に授けざる。應侯曰く、善し、と。乃ち延いて坐に入れて、上客となし、入朝して、蔡澤を秦の昭王に言ふ。昭王、召し見て語り、大に之を說び、拜して客卿となす。應侯、因つて病を謝して、相印を歸さむことを請ふ。昭王、彊ひて應侯を起す。應侯、病篤しと稱す。范睢、相を免ず。昭王、新に蔡澤の計畫を說び、遂に拜して秦の相となす」とある。

【詩意】紛紛として、互に他の權勢を傾けて奪ひ合ひ、その間に於て、陰謀を廻らし、勢を得れば、一そう何か仕出かさうと考へ、勢を失へば、まことに憂に堪へぬ有樣、これは、戰國の末に於ける有位者の常態である。范睢の如きも、その末路に當つて、蔡澤を怒るにも及ばぬので、この時、當年の老穰侯の身の上を問へば、すぐに分かることであつて、つまり、天運循環、自分は、曩に追ひ退けた穰侯と同一の破目に成つて來たのである。

## 范增

不識興王自有眞。識らず、興王、自ら眞あるを。
尊前示玦謾勞神。尊前、玦を示して、謾に神を勞す。

【字解】【一】興王　物興する帝王。【二】自有眞　眞正の氣象。【三】尊前　宴上に同じ。【四】示玦　玦は玉玦、腰に佩ぶる玉の飾り。【五】翁多智　翁は范增を指す。【六】王家老婦人　史記陳丞相世家に「王陵、兵を以て漢に屬す。項羽、陵の母を取つて、軍中に置く。陵の使至れば、東嚮して陵の母を坐せしめ、以て陵を招く。陵の母、すでに私に使者を送り、泣いて曰く、老妾の爲に陵に語れ、謹んで漢王に事へよ。漢王は長者なり。老妾の故を以て、二心なる無かれ。妾、死を以て使者を送らむ、と。遂に劍に伏して死す」とある。

當時誰道翁多智。當時誰か道ふ、翁、智多しと、
不及王家老婦人。及ばず、王家の老婦人。

【題義】史記項羽本紀に「沛公、旦日、百餘騎を從へ、來つて項羽を見、鴻門に至る。項王、卽日、因つて沛公を留めて、與に飲む。項王・項伯、東嚮して坐し、亞父、南嚮して坐す。亞父とは范增なり。沛公、北嚮して坐し、張良、西嚮して侍す。范增、數ば項王を目し、佩ぶるところの玉玦を擧げて、以て之に示すもの三たび、項羽默然として應せず。范增、起つて出で、項莊を召し、謂つて曰く、君王、人と爲り忍びず、若、入つて、前んで壽を爲せ、壽畢らば、請うて劍を以て舞ひ、因つて、沛公を坐に擊つて之を殺せ。しからずんば、若が屬、皆且に虜にせられむとす、と。莊、すなはち入つて壽を爲し、壽畢り、劍を以て舞はむことを請ふ。項王曰く、諾と。項莊、劍を拔き起つて舞ふ。項伯も亦た劍を拔いて起つて舞ひ、常に身を以て沛公を翼蔽す。莊、擊つを得ず。沛公、起つて厠に如き、因つて、樊噲を招いて出でしめ、ここに于て、遂に去り、乃ち張良をして留まつて、沛公に謝せしめ、すでに、去つて、間に軍中に至る。張良、入つて謝して曰く、沛公、栖杓に勝へず、辭する

能はず、謹んで、臣良をして、白璧一雙を奉じ、再拜して大王足下に獻せしめ、玉斗一雙、再拜して大將軍足下に奉ず。項王曰く、沛公、安くにか在る。良曰く、大王が之を督過するに意ありと聞き、身を脱して獨り去る、すでに、軍に至らむ、と。項王、すなはち璧を受けて、これを坐上に置く。亞父、玉斗を受けて、これを地に置き、劍を拔いて撞いて之を破つて曰く、咳、豎子、ともに謀るに足らず、項王の天下を奪ふものは、必ず沛公ならむ。吾が屬、今これが虜とならむ」とある。

【詩意】范增は、やがて新興の天子ともなるべき人には眞氣象があつて、到底犯すべからざることだに識別せず、何でも、彼でも、之を殺さうとして、鴻門の宴上、腰下の玉玦を擧げて、合圖となし、徒に精神を勞した。その當時、誰か范增を智者といつたか、その天命を解することは、とても、王陵の老母にも及ばず、これでは、決して、智者とは云はれまい。

## 張子房

不握兵權只坐籌。
苦辭萬戸乞封留。
縱令不早尋仙去。

張子房

兵權を握らず、只だ坐して籌る、「を乞ふ。
苦に萬戸を辭して留に封せられむこと」
縱ひ早く仙を尋ねて去らざらしむるも、

【字解】【一】坐籌　常に帷幄の謀に參する。【二】苦　れんごろに。【三】封留　留は地名、因つて、留侯といふ。史記留侯世家に「漢、功臣を封ず、良、未だ嘗て戰鬪の功あらず。高帝曰く、籌を運らし、勝を千里の外に決するは、子房の功なり、と。自ら齊の三萬戸を擇ばしむ。良曰く、はじめ、臣、下邳に起り、上と留に會す、臣、願はくは、留に封ぜらるれば足れり、敢て三萬戸に當らず」とある。【四】尋仙去　留侯世家に「願はくは、人間の事を棄て、赤松子に從つて游ばむのみ、と。乃ち辟穀導引輕身を學ぶ」とある。【五】賜醢　李陵の蘇武に答ふる書に「むかし、蒯聵を誅せし後、その肉を醢漬として諸侯に賜はり、その叛逆の心を誓めた。

【題義】張良、字は子房、韓人、史記の世家に其傳がある。

【詩意】張子房は、將軍となつて、兵權を握らず、唯だ帷幄の中に在つて謀に參し、大に功臣を封する時、苦請して、萬戸の封を辭し、そして、留に封せられた。かくの如く、謙退して、高祖の信用を得て居たから、たとひ、早く仙を尋ねて世事を謝せずとも、さしもの高帝も、この人だけには、韓彭の肉の鹽漬を賜はらなかつたであらう。

天子終無賜醢謀。

天子、終に醢を賜ふの謀なからむ。

## 賈誼

凶吉何由鵩鳥知。
才高暫謫未須悲。

賈誼

凶吉、何に由つてか鵩鳥知る、
才高くして、暫謫、未だ悲むを須ひず。

【字解】【一】鵩鳥知　史記賈誼列傳に「賈生、長沙王の太傅となる、三年、鵩あり、飛んで賈生の舍に入

秋風不灑梁園淚。秋風、灑がず梁園の淚、
宣室寧無再見時。宣室、むしろ再見の時なからむや。

へらく、書、長きを得ずと。これを傷悼し、乃ち賦を爲り、以て自ら廣めて曰く、野鳥入處兮主人莽レ去、請問二子鵩一兮子去何之、吉乎告レ我、凶言二其災一とある。【二】梁園淚　賈誼傳に「梁の懷王は、文帝の少子、愛ざられて、書を好む、故に賈生をして之に傅たらしむ。居ること數年、懷王、騎し、馬より落ちて死す、後なし。賈生、自ら傅となつて無狀なるを傷み、哭泣歲餘にして亦た死す、年三十三」とあり、李白の詩に空餘賈生淚、相顧共悽然とある。【三】宣室　賈誼傳に「後歲餘、賈生徵されて見ゆ。孝文帝、方に釐を受けて宣室に坐す。上、鬼神の事に感ずるに因つて、鬼神の本を問ふ。賈生、因つて具さに然る所以の狀を道ふ。夜半に至り、文帝、席を前め、すでに絕めて曰く、吾、久しく賈生を見ず、自ら以爲へらく、これに過ぎたり、と。今及ばざるなりと。居ること、これに頃らくして、拜して、梁の懷王の太傅となす」とある。

【題義】賈誼は洛陽の人、史記に其本傳がある。

【詩意】今後の吉凶を鵩鳥が如何して知らうか。賈誼の高才を以てして、暫く遷謫された處で、決して悲むには及ばない。賈生は、梁の懷王の死を傷んで、自分も、その跡を追うて、ぢきに死んだから仕方がないが、もし秋風の中に梁園の淚を灑ぐ樣なことがなかつたならば、宣室に於て、再び天子に引見されることが、いかで無かるべき、屹度、有つたに相違ない。

り、坐隅に止まる。楚人、鵩を命づけて鵩といふ。賈生、すでに謫を以て長沙に居る、長沙卑濕、自ら以爲

## 董仲舒

董仲舒

早奏文章直殿廬。早く文章を奏して、殿廬に直す、
茂陵還復訪遺書。茂陵、還た復た遺書を訪ふ。
寂寥猶抱春秋傳。寂寥猶ほ抱く春秋の傳、
誰問江都老仲舒。誰か問はむ江都の老仲舒。

【字解】【一】早奏文章　司馬相如の事を云ふ。史記司馬相如傳に「楊得意、狗監となりて上に侍す。上、子虛賦を讀んで、これを善しとす。得意曰く、臣の邑人司馬相如、この賦を爲る」とある。【二】訪遺書　司馬相如傳に「相如、すでに病んで免じ、茂陵に家居す。天子曰く、司馬相如、病甚し、往いて、從つて悉く其書を取るべし、と。所患をして往かしむ。而して、相如、すでに死し、家に書なし。その妻に問ふ、對へて曰く、長卿、もとより未だ嘗て書あらざるなり、未だ死せざる時、一卷の書を爲つて曰く、使者來つて書を求むるあらば、これを奏せよ、と。その書、封禪の事を言ふ、所出奏す」とある。【三】春秋傳　傳は注釋、左公穀の三家の書は、卽ち春秋の注釋である。

【題義】漢書の本傳に「董仲舒は、廣川の人なり。少にして、春秋を治め、孝景の時、博士となる。帷を下して講誦し、三年、園を窺はず。武帝卽位、賢良文學の士を擧ぐ、仲舒、賢良を以て對策す。天子、以て江都の相となす」とあつて、金檀の按に「廣川は、今の河間府景州」とある。

【詩意】司馬相如は、早く文章を進め、召されて、宮中に當直し、茂陵に病死した時も、敕使を下して、その遺書を訪求された位。然るに、董仲舒は、終生、寂寥の中に在つて、春秋の注釋を抱き、專心に研究して居たが、誰も、その江都に居るのを尋ねる人もない位であつた。

【餘論】司馬相如と董仲舒とを對比した處が、一寸新らしい。

## 李廣

李廣

猿臂(一)將軍本自賢。　猿臂の將軍、本と自ら賢なり、
灞陵(二)醉尉竟難全。　灞陵の醉尉、竟に全うし難し。
不聞當日王孫(三)貴。　聞かずや、當日、王孫の貴き、
重到淮陰賞(四)少年。　重ねて、淮陰に到つて少年を賞せしを。

【詩意】李將軍は、猿臂長くして射藝に長じ、且つ本來賢であつたが、灞陵の醉尉は、後來、その身を全うし得ず、遂に李將軍に殺された。むかし、韓信が尊貴になつた時、再び淮陰に至りて、自分を辱かしめた少年を賞したといふが、李將軍は、これを聞かなかつたのか、何にしても、これは、將軍の尉、醉つて廣を呵止す。廣の騎曰く、故の李將軍。尉曰く、今の將軍、尚ほ夜行するを得ず、何ぞ乃ち故なるなや、と。廣を止めて、亭下に宿せしむ。居ること、何くもなくして、天子乃ち召し、廣を拜して右北平太守となす。廣、卽ち灞陵尉を請ひ、與に俱に軍に至つて、これを斬る」とある。【三】王孫　韓信を云ふ、史記淮陰侯傳に「漂母曰く、吾、王孫を憐んで、これに食を進む、豈に報を望まむや」とある。【四】賞少年　淮陰侯傳に「淮陰屠中の少年、信を侮るものあり。曰く、若、長大、好んで刀劍を帶ぶと雖も、中情怯るるのみ。これを衆辱して曰く、信、能く死せば我を刺せ、死するを能はずんば、我が胯下より出でよ、と。ここに于て、信、これを熟視し、俛して胯下より出でて蒲伏す。一市の人、皆笑うて以て怯となす。漢の五年正月、齊王、信を徙して楚王となし、下邳に都す。信、國に至り、已た辱めし少年、胯下より出でしめしものを召し、以て楚の中尉となす」とある。

【字解】【一】猿臂　史記李將軍傳に「廣、人と爲り、猿臂長く、その善射、亦た天性なり」とある。【二】灞陵醉尉　李將軍傳に「かつて、夜、一騎を從へ、出でて人の田間より飲んで還り、灞陵亭に至る。灞陵



に取つて、甚だ宜しくないことである。

## 田千秋

田千秋

功名何必任才謀(一)。　功名、何ぞ必ずしも才謀に任かせむ、
遇合(二)逢時便可收(三)。　遇合、時に逢へば、便ち收むべし。
高寢(四)郎官頭已白。　高寢の郎官、頭、すでに白く、
一言悟(五)主卽封侯。　一言、主を悟らしめて卽ち封侯。

【題義】田千秋の事は、前に卷一、長安道、卷三、寓感の第十八に見えたが、漢書の本傳に「千秋、高寢郎となる。會ま、衞太子、江充に譖敗せらる。これに久しうして、千秋、急變を上り、太子の寃を訟へて曰く、子、父の兵を弄す、罪、當に笞つべし。天子の子、過誤人を殺す。何の罪に當らむや。臣、かつて夢に一白頭翁を見る、臣に敎へて言はしむ、と。上、大に感悟し、召し見て之を悅び、謂つて曰く、これ高廟の神靈、公をして我に敎へしむ、公、當に遂に我が輔佐となるべし、と。立どころに千秋を拜して、大鴻臚となす」とあり「車千秋、本姓は田氏、年老いて朝見し、小車に乘じて殿に入るを得たり、因つて、車丞相と號す」とある。

【字解】【一】遇合　まはり合せ。【二】可收　功名を收めることが出來る。【三】高寢郎官　高帝の寢廟に奉仕するもの。【四】悟主　武帝を感悟せしめる。【五】卽封侯　卽坐に侯に封ぜられる。

【詩意】功名は、何も必ずしも、才謀に任かせて、巧者に立ち廻はらずとも善いので、うまく時を得て、君臣互に遇合すれば、容易に之を收めることが出來る。高廟の郎官たりし田千秋は、卽ち其一例であつて、白髮頭に成つてから、唯だ一言を以て、武帝を感悟せしめ、卽坐に、侯に封せられたのは、まことに、大したことである。

## 王章

王　章

外家勢重直言稀。
京兆書陳蹈禍機。
合浦老妻須莫怨。
絕勝臥病死牛衣。

【題義】漢書王章傳に「章、字は仲卿、泰山鉅平の人なり。少にして、文學を以て官となる。成帝立つ、章、選を以て京兆尹となる。時に、帝の舅大將軍王鳳、政を輔く。章、鳳に擧げらるると雖も、鳳の專權を非とし、鳳に親附せず。會ま、日、これを蝕するあり、章、封事を奏す。召されて見ゆる王章の死後、妻子の徙された地。【四】牛衣　亂麻を編みて作りしもの、一に龍具といふ、卽ち粗布。

【字解】【一】外家　天子の外戚。【二】京兆　長安を中心として近傍一帶の地、京兆尹は、卽ち其長官の名、日本でいふと、東京府知事といつた樣なものであるが、その權力はもとより比較にならぬ。【三】合浦

や、言ふ、鳳は任用すべからず、宜しく、更に忠實を選ぶべし、と。上、初めは章の言を納受せしが、後、鳳を退くるに忍びず、章、これに由つて疑はれ、遂に鳳に陷いれられ、罪、大逆に至る。初め、章、諸生と爲つて長安に學ぶや、ひとり妻と居る。章、疾病して被なく、牛衣中に臥し、妻と訣れて涕泣す。その妻、これを呵怒して曰く、京師の尊貴は、朝廷の人に在り、誰か仲卿に踰ゆるものぞ。今、疾病困厄、自ら激昂せず、乃ち反つて涕泣す、何ぞ鄙なるや、と。後、章、仕官歷位、京兆となるに及んで、封事を上らむと欲す。妻、又これを止めて曰く、人、當に足るを知るべし、ひとり、牛衣中涕泣の時を念はざるや。章曰く、女子の知るところに非ざるなり、と。書、遂に上り、果して、廷尉の獄に下され、妻子皆收繫せらる。章の小女、年十二ばかり、夜、起つて號哭して曰く、平生、獄上、囚を呼ぶ、數、常に九に至る。今、八にして止む。わが君、もとより剛、先づ死するものは、必ず君ならむ、と。明日、これを問へば、章、果して死す。妻子、皆合浦に徙さる」とある。

【詩意】外戚の王氏は、權勢極めて重くして、直言するものもなかつたのに、京兆尹たりし王章が上書して、これを痛論したのは、取りも直さず、禍機を蹈むものであつた。しかし、合浦に徙された老妻は、これを怨まぬが善いので、たとひ獄死した處で、その昔、病に臥して、むざむざと何も仕出來さず、粗布の中に死ぬよりも、はるかに勝つて居る。

## 揚雄

(一)執戟三朝老從臣。
從來無意據(二)通津。
如何晚把(三)玄經筆。
却爲(四)新都著(五)劇秦。

【題義】漢書揚雄傳に「雄、字は子雲、蜀郡成都の人、蜀より來つて、京師に游ぶ。大司馬車騎將軍王音、その文雅を奇とし、召して、以て門下の吏となし、雄を薦めて待詔たらしむ。歲餘、羽獵賦を奏し、除せられて郎給事黄門となり、王莽・劉歆と竝び、哀帝の初、又董賢と官を同じうす。成哀平の間に當つて、莽・賢、皆三公となり、權、人主を傾け、薦むるところ、拔擢せざるなし。而して、雄、三世、官を徙さず、太玄を草し、以て自ら守るあること泊如たり」とあり、通鑑に「莽の卽位に及び、雄、耆老の次を以て、轉じて大夫となる。雄、法言を作り、卒章、盛に莽の功德を稱し、これを伊周に比すべしといふ。後、又劇秦美新の文を作り、以て莽を頌す、君子病む」とある。

【詩意】揚雄は、戟を執つて天子に近侍し、從臣として、すでに、三世を經、年も寄つて仕舞ひ、もとより、要路の位地に據らうといふ了見もなかつたのである。しかるに、如何なれば、晚年に成つて、太玄經を書いた其筆を把つて、却つて、王莽の新國の爲に劇秦美新の一文を作つたのであるか、その心持は、一寸分からない。

## 馬援

(一)浪泊歸時憶少游。
炎蒸終復困(二)壺頭。
漢庭豈少(三)英年將。
衰老南征苦自求。

【字解】【一】執戟　戟は兩旁に枝の出て居る矛。前に卷一、將進酒の詩中に君不レ見揚子雲、三世執レ戟徒工レ文ととあつて、その處で解釋して置いたが、戟を執つて殿階の下に立つて居る、侍從の臣といふ義。【二】通津　重要なる舟つきの處に比すべき官職、要路の當事者。【三】玄經　詳しくは太玄經といふ。揚雄が易に擬して作つたと稱せられて居るが、易の宇宙現象變化の法則を論定したるに對し、太玄は、宇宙現象に共通なる階段的進展の方式を探究したのである。【四】新都　新は王莽の國號。【五】劇秦　詳しくは劇秦美新。揚雄が王莽に謝びて作つたので、むかしの秦の暴政を劇なりとし、王莽の新國を賛美したのである。その序に「伏して惟るに、陛下、至聖の德を以て、龍興登庸、天に參し、地に貳し、兼れて、神明に竝び、五帝に配し、三王に冠とし、開闢以來、未だ之を聞かざるなり。臣、誠に新の德光の極まり罔きを昭著するを樂み、劇秦美新を作る。未だ萬分の一を究めずと雖も、亦た臣の極思なり」とある。それから、この文は、揚雄の作つたものではないといつて色色辯護する人もあるが、考證の結果、矢張、揚雄に相違ないといふことに成つて居る。

【字解】【一】浪泊歸時憶少游　後漢書馬援傳に「建武十七年、援を伏波將軍に拜し、南、交趾を擊つ。十八年春、軍、浪泊の上に至り、賊と戰つて之を破る。明年正月、援を封じて新息侯となす。援、乃ち牛を

擊ち、酒を釃し、軍士を勞饗し、從容として、官屬に謂つて曰く、吾が從弟少游、常に吾が慷慨大志多きを哀む。曰く、士一世に生く、但だ衣食わづかに足るを取り、下澤の車に乘じ、款段の馬に御し、郡の掾吏となり、墳墓を守り、鄉里、善人と稱すれば、これ可なり。盈餘を求むるを致さば、但だ自ら苦むのみ、と。吾が溫泊西里の間に在り、虜、未だ滅びざるの時に當つて、下澤上霧、毒氣蒸蒸、仰いで飛鳶を視れば、跕跕として水中に墮つ、臥して、少游平生の時の語を念ふに、何ぞ得べけむや。今、士大夫の力に賴つて、大息を被蒙し、猥りに諸君に先つて、金紫を紆佩し、且つ喜び、且つ慙ぢ」とある。【二】 困壺頭　馬援傳に「建武二十四年、武威將軍劉尙、武陵五溪の蠻夷を擊ち、深く入つて軍沒す。援、因つて、復た行かむことを請ふ。時に年六十二。帝、その老を愍んで、未だ之を許さず。援、自ら請ふ、臣、尙ほ能く甲を被り、馬に上る、と。帝、これを試みしむ。援、被に據つて顧盼し、以て用ふべきを示す。帝、笑つて曰く、矍鑠たる哉、この翁や、と。遂に援を遣し、中郎將馬武・耿舒・劉匡・孫永等、四萬餘人を率ゐて五溪を征し、三月、進んで壺頭に營す。賊、高きに乘じて險を守り、水疾くして舟上るを得ず。會ま、暑甚しく、士卒多く疫死す。援、亦た病に中りて、遂に困み、乃ち岸を穿つて室と爲し、以て炎氣を避く。賊、每に隙に升つて鼓譟す、援、輒ち足を曳いて以て之を觀る。左右、その壯志を哀み、これが爲に流涕せざるなし」とある。【三】 英年　壯年に同じ。

【題義】 馬援、字は文淵、扶風茂陵の人、後漢書に其傳がある。

【詩意】 馬援が浪泊から歸つた時、その昔、從弟の少游の言つたことを憶ひ出して、感慨に堪へなかつたが、後に五溪の苗族を征伐に出かけ、炎蒸甚しき爲に、壺頭の地に困んで、遂に病死した。堂堂たる漢廷に於て、壯年の將軍なきに非ざるに、馬援は、衰老の身を以て南征したのは、自分から苦痛を求めたのである。

## 袁安

洛下人家懶去干。
閉門偃臥雪漫漫。
立朝不附薰天勢。
應爲平生耐得寒。

朝に立つて附かず、天を薰するの勢、門を閉ぢて、偃臥す雪漫漫。洛下の人家、去つて干すに懶し、

【字解】【一】 洛下　洛中に同じ、洛陽の中。【二】 去干　干はをかす。辱れる、訪問する。【三】 閉門偃臥　後漢書袁安傳の注に「時に、大雪、地に積むこと丈餘、洛陽の令、自ら出でて案行す。人家を見るに、皆雪を除き、食を乞ふものあり。安の門に至る、行路あるなし。安、すでに死せりと謂ひ、人をして雪を除かしむれば、安の偃臥するを見る。問ふ、何を以て出でざるか。曰く、大雪、人皆飢ゆ、宜しく、人を干すべからず、と。令、以て賢となし、擧げて孝廉となす」とある。【四】 薰天勢　その焰が天をも薰べる樣な熾んなる勢。

【題義】 後漢書袁安傳に「安、字は邵公、汝南汝陽の人なり。孝廉に擧げられ、陰平長・任城令に除せられ、所在、吏人畏れて之を愛す。河南尹となり、政、嚴明と號す。章和元年、桓虞に代つて、司徒となる。和帝卽位、竇太后、朝に臨む、兄車騎將軍憲、北、匈奴を擊つ。安、太尉宋由、司徒任隗、及び九卿と、朝堂に詣つて上書す、以爲へらく、匈奴、邊塞を犯さず、故なくして師を勞するは、社稷の計に非ず、と。書連りに上る。輒ち寢む。宋由懼れ、遂に敢て復た署議せず。而して、諸卿、稍や自ら引いて去る。安、ひとり、任隗と正を守つて移らず、冠を朝堂に免ぐに至り、固く爭ふもの、十たび上る。太后聽かず。衆、皆これが爲に危懼す。安、色を正しくして自若たり。竇憲、すでに出

づ。又憲の弟執金吾景等、及び貴戚に阿附するものを劾す。竇氏、大に恨む。但だ安隗素行高く、亦た未だ以て之を害するあらず。時に、漢室中ごろ微に、外戚強盛、朝廷の上、皆安に係頼して以て重きを爲す」とある。

【詩意】洛陽の人家を尋ねるのも懶いといつて、袁安は、門を閉ぢて偃れ臥し、折から、雪は地に積んで、白漫漫たる有樣。この人が朝廷に立つて、天も靡べる樣な外戚の勢に阿附しなかつたのは、平生、寒微に耐へ得たからであらう。

## 荀彧　　荀彧

晩惜形弓勢已難。晩に形弓を惜めども、勢、すでに難し、
空期魏武作齊桓。空しく期す、魏武の齊桓と作るを。
猶緣死沮奸雄意。猶ほ死して、奸雄の意を沮むに緣り、
竊鼎遷延到五官。鼎を竊み、遷延して五官に到る。

【字解】【一】形弓　詩經に形弓弧兮とあり、禮記に「諸侯は弓矢を賜はり、然る後に征す」とある。專征の兵權を得たること。【二】魏武　魏の武帝、卽ち曹操。【三】死沮　沮は諫止する。【四】竊鼎　九鼎を盜む、卽ち帝位を奪ふこと。【五】五官　魏の文帝、卽ち曹丕、魏書文帝紀に「建安十六年、五官中郎將副丞相となる」とある。

【題義】魏書に「荀彧、字は文若、潁川潁陰の人なり、淑の孫。曹操の雄略あるを聞いて、これに歸す。太祖、ともに語つて、大に悅んで曰く、わが子房なり、と。以て奮武司馬となし、軍國事は、悉く以て之に咨ふ。八年、太祖、彧が前後の功を錄し、表して、彧を封じて萬歲亭侯となす。十七年、董昭等、太祖に謂ふ、宜しく、爵を國公に進め、九錫、物を備へて、以て殊勳を彰はすべし、と。ひそかに以て彧に諮る。彧以爲へらく、太祖、本と義兵を起し、以て朝を匡し、國を寧んず、忠貞の誠を秉り、退讓の實を守る、君子、人を愛するに德を以てす、宜しく、かくの如くなるべからず、と。太祖、これに由つて、心平かなる能はず。會ま孫權を征す、表請して、彧をして軍を譙に勞せしめ、因つて、輒ち彧を留め、侍中光祿大夫を以て、節を持して、丞相軍事に參せしむ。太祖の軍、濡須に至る。彧、疾んで壽春に留まり、憂を以て薨ず。敬侯と謚す。明年、太祖、遂に魏公となる」とあり、魏氏春秋に「太祖、彧に食を饋る。これを發すれば、乃ち空器なり。ここに于て、藥を飲んで卒す」とある。

【詩意】荀彧は、晩年になつて、魏の武帝が、形弓を賜はり、專征の兵權を得、しきりに、僭上の沙汰を爲すのを遺憾に思つて居たが、これを匡正しやうと思つても、當時の勢、すでに難く、その本志は、唯だ武帝をして、齊の桓公の如く天下を一匡せしめやうといふのであつた。しかし、死んでも、猶ほ姦雄たる武帝を諫沮せしに因り、帝位を奪ふことは、次第にのびのびになつて、武帝の子の曹丕に至つて、はじめて實現された。

## 孔明

莫恨流星墮渭濱。(一)　恨む莫れ、流星の渭濱に墮つるを、
出師未捷已沾巾。(二)　師を出して未だ捷たず、すでに巾を沾す。
天應留取生司馬。(三)　天、應に生司馬を留取し、
歸作他年取魏人。　歸つて他年魏を取るの人と作せしなる」べし。

【字解】【一】流星墮渭濱　渭濱は渭水の岸、卽ち五丈原、諸葛亮の營を定めし地。晉陽秋に「星あり、赤くして芒角あり、東北より西南に流れ、亮の營に投じ、三投三還、往くとき大、還るとき小、俄にして亮卒す」とある。【二】出師未捷　杜甫の詩に出師未捷身先死、長使三英雄淚滿襟とあるに本づく。【三】生司馬　生きて居る司馬仲達、漢晉春秋に「楊儀等、軍を整へて出づ。百姓、奔つて宣王に告ぐ。宣王追ふ。姜維、儀なして旗を反し、鼓を鳴らし、將に宣王に向はむとするが若くせしむ。宣王、乃ち退いて、敢て偪らず。ここに于て、儀、陣を結んで、去つて谷に入り、然る後に喪を發す。百姓、これが諺を爲して曰く、死せる諸葛、生ける仲達を走らす、と。或は以て宣王に告ぐ。宣王曰く、吾、能く生を料るも、死を料る能はざるなり」とあり。宣王は司馬懿の諡號、仲達は其字。

【題義】蜀書に「諸葛亮、字は孔明、瑯琊の人、早くして孤。從父玄素、荆州牧劉表と舊あり、往いて之に依る。亮、躬づから隴畝に耕し、好んで梁父吟を爲し、毎に自ら管仲樂毅に比す。博陵の崔州平、潁川の徐庶、亮と友とし善く、謂うて、信に然りと爲す。徐庶、先主に謂つて曰く、諸葛孔明は臥龍なり、と。先主、三たび草廬を顧み、延いて軍師となす。先主卽位。丞相に拜し、後主の時、武鄉侯に封せらる。建興十二年春、亮、大衆を悉くして、斜谷より出で、流馬を以て運し、武功の五



丈原に據り、司馬宣王と渭南に對す。亮、毎に糧纖がず、己の志をして伸びざらしめしを患へ、これを以て、兵を分つて屯田し、久住の基を爲し、耕す者は、渭濱居民の間に雜はり、しかも、百姓安堵、軍に私なし。相持すること百餘日、その年八月、亮、疾病して軍に卒し、忠武と諡す」とある。

【詩意】流星が渭水の岸なる軍營に落ちて、やがて孔明の病死したのを遺憾に思ふな。なる程、師を出して未だ捷たず、忽ち此に及んだのは、もとより、冥、巾を霑すに足ることである。しかし、天は、生ける司馬仲達を留め置いて、他年、孔明が當面の仇たる魏國を簒奪せしめたから、孔明に於ても、定めて滿足したであらう。

【餘論】作者は、生ける司馬が、他年、魏を取つたから、孔明に於ても恨なかるべしと云つて居るが、決して、さうではない。魏の亡びしは、さることながら、晉の司馬氏は、魏の延長であつて、それが天下を統一し、正統の漢が遂に亡びた上は、依然として、遺憾の極である。元來、孔明の本志は、漢を復するに在つて、その爲に魏を亡すを要するので、漢を復せざる限りは、魏が亡びた處で、何にも成らない。要するに、この詩の如きは、ほんの駄酒落の樣なもので、眞正の詠史として見ることは、出來ず、極言すれば、作者の品位を損する虞さへある。

## 張昭

長史難忘昔受遺。
塞門投老苦憂時。
孝廉猶有當年意。
不遺眞從介子推。

【題義】 吳志に「張昭、字は子布、彭城の人、難を避けて南渡す。孫策創業、昭に命じて、長史撫軍中郎將となし、堂に升つて母を拜し、比肩の舊の如く、文武の事、一に以て昭に委す。策、亡ぶるに臨み、弟權を以て昭に託す。昭、羣僚を率ゐ、立ててこれを輔く。權の尊號を稱するや、改めて、婁侯に封ず。昭、朝見する毎に、詞氣壯厲、義、色に形はる。權、公孫淵が藩と稱するを以て、張彌・許晏を遣して、遼東に至らしめ、淵を拜して燕王となさしむ。昭、諫めて曰く、淵、魏に背いて、討たるるを懼れ、遠く來つて援を求む、本志に非ざるなり。もし、淵、圖を改め、自ら魏に明かにせむと欲せば、南使、回らず、亦た笑を天下に取らずや、と。權、ともに相反覆す。昭の意、彌よ切、

【字解】 【一】 長史　張昭、その初、孫策の爲に、長史に任ぜらる。なほ、題義の項を見よ。【二】 受遺　遺は遺託。【三】 塞門　題義の項を見よ。【四】 投老　年老いたるを以て辭職を言ひ立てる。【五】 孝廉　新序に「晉の文公、國に反る、介子推、遺は遺託。【三】 塞門　題義の項を見よ。【四】 投老　年老いたるを以て辭職を言ひ立てる。【五】 孝廉　新序に「晉の文公、國に反る、介子推、出でずして焚死す」とある。【六】 介子推





權、堪ふる能はず、刀を按じて怒つて曰く、吳國の士人、宮に入れば孤を拜し、宮を出づれば君を拜す、孤の君を敬する、亦た至れりとなす。而かも、數ば衆中に於て孤を折く。孤、かつて計を失せむことを恐る、と。昭、權を熟視して曰く、臣、言の用ひられざるを知ると雖も、毎に愚忠を竭すものは、誠に太后崩ずるに臨んで、老臣を牀下に呼んで遺詔し、顧命の言、故と在るを以てのみ、と。因つて、涕泣横流す。權、刀を擲つて地に致し、昭と對泣す。然れども、卒に彌晏を遣して往かしむ。昭、言の用ひられざるを忿り、疾と稱して朝せず。權、これを恨み、土、その門を塞ぐ。昭、又内に于て土を以て之を封ず。淵、果して彌晏を殺す。權、數ば昭に慰謝す。昭、固く起たず。權、因つて出で、その門を過ぎて呼ぶ。昭、疾篤きを辭す。權、その門を燒き、以て之を恐れしめむと欲す。昭、更に戸を閉づ。權、人をして火を滅せしめ、門に住まること、良や久し。昭の諸子、ともに昭を扶けて起つ。權、載せて以て宮に歸り、深く自ら克責す。昭、已むを得ずして、然る後に朝會す」とある。

【詩意】 張昭は、長史より出身し、その初、孫策等から遺託を承けた其義を忘れず、孫權を極諫せし後、門を塞ぎ、老年を言ひ立て、しかも、衷心では、あくまで時を憂へて居た。孫權も、亦た當年の好意を存し、張昭をして、まことに介子推に從つて焚死せしむる樣なことは流石に爲さなかつた。

## 王猛

軍門被(一)褐異(二)隆中。　軍門、褐を被つて、隆中に異なれり、
抱(三)策歸(四)秦竟事(五)戎。　策を抱いて秦に歸し、竟に戎を事とす。
猶喜遺言眞有(七)識。　猶ほ喜ぶ、遺言、眞に識あるを、
不教飲馬向(八)江東。　馬に飲うて、江東に向はしめず。

【題義】十六國春秋に「王猛、字は景略、北海劇の人なり、瓌姿儁偉、博學にして兵書を好み、華山に隱る。桓溫、關に入る、猛、褐を被つて之に詣り、一面して當世の事を談じ、蝨を捫つて言ひ、旁に人なきが若し。溫、察して之を異とす。苻堅、將に大志あらむとす、猛の名を聞き、呂婆樓を遣して之を招き、一見、便ち平生の若し。語、廣興の大事に及べば、堅と同契、玄德の孔明に遇ふが若きなり。堅の僭立するに及び、一歲五遷、位、司空に至る。後、猛、疾甚し。上疏して恩を謝す。堅、これを覽て流涕し、悲、左右を動かす。病篤し、親ら臨んで省視し、問ふに後事を以てす。猛曰く、晉は僻陋と雖も、吳越は乃ち正朔相承く、仁を親み、鄰を善くするは、國の寶なり。臣歿するの後、願はくは、晉を以て圖と爲さざれ、と。言終つて死す。堅、これを哭して慟す。歛する比、三たび臨む、侍中尙書を贈り、謚して武侯といふ」とある。

【詩意】王猛が短衣を著て、軍門で桓溫に謁したのは、諸葛亮の隆中に居た時、劉備が尋ねて來たのとは、餘程違つて居る。そこで、王猛は、胸中に策略を藏して、秦の苻堅に事へ、遂に西方を經略した。その遺言は、まことに識見ありと稱すべく、苻堅に忠告し、馬に飲うて、江東に向ふなといつたのは、まことに喜ぶべきことであつた。然るに、苻堅は、後年、これを守らず、兵を移して南侵した爲に、淝水に敗れ、やがて、秦は破滅に臨む樣に成つて仕舞つた。

【字解】(一) 軍門　桓溫の陣門。(二) 被褐　褐は短衣。(三) 隆中　諸葛亮躬耕の地。(四) 抱策　策略を胸中に抱く。(五) 歸秦　秦は苻堅。(六) 事戎　西方を經略する。(七) 有識　識見がある。(八) 江東　即ち江左、東晉をいふ。



## 謝安

談笑新(一)亭鼎不移。　新亭に談笑して、鼎、移らず、
坐籌(二)强虜在(三)枰棋。　坐して、强虜を籌る、枰棋に在り。
平生事業從容得。　平生の事業、從容として得たり、
莫道無心屐折遲。　道ふ莫れ無心にして屐折るること遲しと。

【題義】晉書に「謝安、字は安石、尙の從弟なり。少にして、重名あり、累りに辟せども就かず、弟萬の黜廢に及びて、はじめて仕進の志あり。時に年すでに四十餘、徵して侍中に拜せられ、吏部尙

【字解】(一) 新亭　桓溫の止まり居る地、題目の項を見よ。(二) 鼎不移　晉室の亡びざりしをいふ。(三) 籌强虜　苻堅の入寇を撃退せむことを謀る。(四) 枰棋　圍棋。(五) 屐折　題目の項を見よ。

書中虞軍に遷る。簡文帝、病篤し。桓溫、上疏して、安の宜しく顧命を受くべきを薦む。帝崩ずるに及んで、溫、入つて山陵に赴き、新亭に止まり、大に兵衞を陳して、將に晉室を移さむとし、安及び王坦之を呼び、坐に於て之を害せむと欲す。坦之、甚だ懼れ、計を安に問ふ。安、神色變せずして曰く、晉祚の存亡、この一行に在り、と。すでに溫を見る。坦之、流汗衣を沾し、倒に手板を執る。安、從容として席に就き、坐定まるや、溫に謂つて曰く、安聞く、諸侯道あれば、守、四鄰に在り、と。明公、何ぞ壁後に人を置くを須ひむや。溫、笑つて曰く、正に自ら爾らざる能はざるのみ、と。遂に笑語して日を移す。坦之、安と初め名を齊しうす。ここに至りて、方に坦之の劣を知る。これに頃くして、司徒を加へ、復た侍中を加へらる。苻堅强盛、衆を率ゐて百萬と號し、淮淝に次し、京師震恐す。安に征討大都督を加ふ。玄、入つて計を問ふ。安、夷然として懼るる色なし。答へて曰く、すでに別に旨あり、と。すでにして、寂然たり。玄、敢て復た言はず。乃ち張令をして、重ねて請はしむ。安、遂に駕を命じて山墅を出づ。親朋畢く集まる。方に玄と棊を圍み、別墅を賭す。安、常に、棊、玄より劣、この日、玄懼れ、便ち敵手となつて、又勝たず、安、顧みて、その甥羊曇に謂つて曰く、墅を以て汝に乞ふと。安、遂に游涉し、夜に至つて乃ち還り、將帥に指授して、各〻その任に當る。玄等、すでに堅を破る。驛書あり、至る。安、方に客に對して棊を圍み、書を看て既に竟り、便ち攝して牀上に放ち、了に喜色なく、棊、故の如し。客、これを問ふ。答へて曰く、小兒輩、遂に已に賊を破る、と。すでに、罷めて內に還り、戶限を過ぐれば、心喜ぶこと甚しく、屐齒の折るるを覺えず。その情を矯め、物を鎭することかくの如し」とある。

【詩意】謝安は、新亭に於て、桓溫に逢ひ、談笑終日、その爲に、晉室は九鼎を移さず、先づ無事に濟んだ。次に、苻堅の入寇せし時も、棊を圍む間に於て、これを擊退する策を考へて居た。彼が平生の事業は、すでに、從容として得たものであつて、淝水戰捷の後、客の歸るを待ち兼ね、あまりに喜んで、無心に下駄の齒を折つたといふことなどは、特に取り出して言はずとも宜しい。

## 韓子

自古南荒竄逐過。古しへより、南荒、竄逐過ぐ、
佞臣元少直臣多。佞臣元と少くして、直臣多し。
官來瀧吏休相誚。官來る、瀧吏、相誚るを休めよ、
天要潮人識孟軻。天、潮人をして孟軻を識らしむるを要す。

【字解】【一】南荒　潮州は南邊の僻地なるが故に云ふ。【二】竄逐　都を逐はれて流謫された人。【三】官來　官は、官職ある人を呼ぶの稱。韓愈の瀧吏の詩に往問三瀧頭吏、潮州尙幾里、瀧吏聳手笑、官何問之愚とある。【四】瀧吏　瀧は早瀨、吏は其處の渡船を監督して居る役人。【五】孟軻　孟子の如き人、韓愈は自ら孟子に比して居たので、その答孟尙書書に「韓老の害は楊朱に過ぎ、韓愈の賢は孟子に及ばず」といひ、原道に「軻の死するや、その傳を得ず」とある。

【題義】舊唐書に「韓愈、字は退之、昌黎の人。進士の第に登り、言を發する眞率、畏避するところなし。刑部侍郎となる。時に、鳳翔の法門寺に護國眞身塔あり、塔内に釋迦文佛指骨一節あり、その書、本と法を傳へ、三十年に一たび開き、開けば、歳豐に人泰なりといふ。十四年正月、上、中使杜英奇をして、宮人三十人を押して、香花を持し、臨皐驛に赴いて、佛骨を迎へしめ、光順門より大内に入り、禁中に留むること三日、乃ち諸寺に送る。王公士庶、奔走施捨、唯だ後に在ることを恐れ、百姓、業を廢し、產を破り、頂を燒き、臂を焚いて、供養を求むるものあり。愈、もとより佛を喜ばず、上疏して之を諫む。疏奏す。憲宗、怒ること甚し。一日を間し、疏を出して、以て宰臣に示し、將に極法を加へむとす。裴度・崔羣、奏して曰く、韓愈、上、尊聽に忤ふ、まことに、宜しく罪を得べし。然り而して、内に忠懇を懷き、黜責を避けざるに非ずんば、豈に能く此に至らむや。伏して乞ふ、稍や寬容を賜ひ、以て諫者を來せ。上曰く、愈、我が佛を奉ずる、太だ過ぎたるを言ふ、我、なほ之を容るるを爲さむ。東漢、佛を奉ずるの後、帝王、咸な夭促を致すといふに至りては、何ぞ言の乖刺せるや。愈、人臣となつて、敢て爾かく狂妄、もとより赦すべからず、と。ここに於て、人情驚惋、乃ち國戚諸貴に至るまで、亦た愈を罪する、太だ重きを以て、事に因つて之を言ふ。乃ち貶して、潮州刺史となす」とある。

【詩意】むかしから、潮州等、南荒の地は、竄逐の臣の通過する處で、その中に、侯臣は元と少くして、直臣が多く、直臣なればこそ、罪を得て、かかる遠地に貶謫せられるのである。韓愈の來りし時、瀧吏は、決して相謂らぬが善かつたので、皇天は、潮人の未だ文化に向はざるを憐み、孟軻の樣な大賢を面識せしめむが爲に、特に韓愈を其地に遣されたのである。

## 題宋徽廟畫眉百合圖

宋の徽廟の畫眉百合の圖に題す

百合無殘六合塵。百合殘すなく六合は塵、
汴宮啼鳥怨無人。汴宮の啼鳥、人なきを怨む。
不知風雪龍沙地。知らず、風雪龍沙の地、
還有圖中此樣春。還た圖中此樣の春あるを。

【題義】徽廟は、徽宗皇帝。畫眉は鳥の名、頰白。この詩は、宋の徽宗皇帝の御筆たる畫眉百合の圖に題したのである。圖繪寶鑑に「徽宗萬幾の暇、惟だ書畫を好み、天縱の妙を具へて、晉唐の風韻あり。墨花石を善くし、墨竹を作るに、緊細にして濃淡を分たず、一色焦墨、尤も意を花鳥に注ぎ、點睛、多く黑漆を用ひ、隱然豆許、高く縱素に出で、幾んど活動せむと欲す。畫後の押字、天水及び宣和政

【字解】【一】百合　ゆりの花。
【二】無殘　殘りなく散つて仕舞ふ。
【三】六合　四方上下を合稱す。【四】汴宮　宋は、汴京に都せしが故に云ふ、卽ち今の河南省開封府。【五】龍沙　龍堆と沙漠、塞外の地。宋史徽宗本紀に「金人入寇、位を太子に傳ふ、靖康三年、金に擄へられ、紹興五年に至つて、五國城に殂す」とある。

和の小璽を用ひて志し、或は瓢印蟲魚の篆文を用ふ」とある。

【詩意】百合の花は、殘りなく散つて仕舞ひ、六合の内は、唯だ戰塵のみ、汴宮の啼鳥は、荒蕪の餘、寂として人なきを怨む樣である。徽宗は、後に風雪慘澹たる塞外の地に移されたが、そこには、圖中に見るところの此樣な春があらうか、いや、決して無かつたであらう。

【餘論】花を百合といふに因んで、六合の字を出し、圖中に畫眉の鳥があるから、第二句に啼鳥の字を點し、結句の此樣春は、花鳥を合せて云つたのである。

## 題湘君圖

祠前修竹楚山青。　祠前の修竹、楚山青し、
風珮時來過洞庭。　風珮、時に來つて洞庭を過ぐ。
月夜莫彈瑤瑟怨。　月夜、彈ずる莫れ瑤瑟怨、
夫君不見有誰聽。　夫君見えず、誰あつてか聽かむ。

【字解】【一】風珮　風に吹かるる環佩。【二】瑤瑟　湘靈、即ち湘君の靈魂が毎に瑟を彈ずるといふことで、湘靈鼓瑟といふ詩題もあるし、劉禹錫の詩に楚客欲聽瑤瑟怨、瀟湘深夜月明時とあり、琴曲譜錄に「上古琴弄の名、湘妃怨あり、女英製す」とあり、許彥周詩話に「客あり、湘妃廟に泊す、夜半寂らず、奥衞の廟中に入り、酒を置き、瑟を鼓し、殆んど明くるや、水を絕ち、空に浮んで去るかを見る。因つて廟に入れば、詩あるを見る。曰く、碧杜紅蘅鎖紫香、冰絃彈月弄二新涼一、峰巒向レ曉渾相似、九處堪レ疑九斷腸」とある。【三】夫君　一に重華に作る、即ち舜を指す。

【題義】湘君は舜の妻娥皇、その妹の女英は湘夫人といひ、楚辭に見ゆ。史記始皇本紀に「江に浮んで湘山祠に至る、大風に逢うて、幾んど渡るを得ず。上、博士に問うて曰く、湘君は何の神ぞ。博士對へて曰く、これを聞く、堯の女、舜の妻にして、ここに葬る、と。始皇大に怒り、刑徒三千人をして、皆湘山を伐つて、その山を赭にせしむ」とある。

【詩意】祠前には、修竹生ひ茂り、楚山の色翠にして、その間に隱見して居る。湘君は、風に環佩を響かせ、時時來て、洞庭の湖上を通過する。湘君は、瑟を彈ずることが上手であるといふが、月夜、恨を寄せて、瑟を彈せぬが善いので、夫たる舜が居なければ、誰も注意して聽く人も有るまいと思はれる。

## 題洛神圖

晚步芳洲拾翠歸。　晚に芳洲を步し、翠を拾うて歸る、
不愁風浪溼仙衣。　愁へず、風浪の仙衣を溼すを。
彩雲一滅無尋處。　彩雲一たび滅して、尋ぬる處なし、
應逐陳王去馬飛。　應に陳王の去馬を逐うて飛ぶなるべし。

【字解】【一】芳洲　芳草の生ひ茂れる長洲。【二】拾翠　草を摘む。【三】陳王　即ち曹植、文選李周翰の注に「洛神は、洛水に溺れて神となるを云ふなり、植、感ずるところあつて賦す」とある。

洛神の圖に題す

【題義】洛神は、この卷の十宮詞・魏宮の條に、文選李善注を引いて詳述して置いたから、それを見て貰ひたい。

【詩意】洛水の神は、日暮に、芳草茂れる長洲の上を歩いて、草を摘み、やがて、風浪大に怒り、そのしぶきが仙衣を溼すことをも顧みない。やがて、彩雲一たび消え、どこへ往つたか、尋ねても、分からぬが、定めて、陳王の馬を逐ひかけて、飛行して居るのであらう。

## 二喬觀兵書圖　二喬、兵書を觀るの圖

共憑花几[一]倦新妝。ともに花几に憑つて、新妝に倦む、
玄女陰符讀幾行[二]。玄女の陰符、讀む幾行。
銅雀那能鎖春色[三]。銅雀、那ぞ能く春色を鎖さむ、
解將奇策教周郎[四]。奇策を將て周郎に教ふるを解す。

劉禹錫の詩に得レ讀玄女符、生當二事レ逢時一とある。【三】銅雀　魏の曹操の築きし臺。【四】鎖春色　杜牧の赤壁の詩に東風不レ與二周郎一便。銅雀春深鎖二二喬一とある。【五】周郎　周瑜、小喬の夫。

【字解】【一】花几　花模樣を飾りとした腰かけ。【二】玄女陰符　黄帝内傳に「帝、蚩尤を伐つ。玄女、帝の爲に夔牛鼓八十面を製す」とある。陰符は、戰國策に「太公陰符の書を得たり」とあつて、兵書の類。

【題義】吳書周瑜傳に「建安三年、孫策、荆州を取らむと欲し、瑜を以て中護軍となし、江夏太守を領せしめ、從つて、皖を攻めて之を拔く。時に、喬公の二女を得たり。策、自ら大喬を納れ、瑜、小喬を納る」とあり、江表傳に「策、從容として、瑜に戲れて曰く、喬公の二女、滅離すと雖も、吾二人を得て壻となす、亦た歡を爲すに足る」とある。但し、二喬が兵書を讀んだことは、確とした出處はないので、畫師の想像であらう。

【詩意】大喬小喬の二女は、やつと新妝が濟んだから、綺麗な腰かけに倚りかかつて、玄女の草せし兵書を手にし、その幾行かを讀み畢つた。曹操が、いくらあせつた處で、銅雀臺中、いかで、この春色を鎖して置くを得べき。さういふ場合になると、この女は、奇策を其夫たる周郎に教へて、物の見事に、曹操の軍勢を擊退するであらう。

## 風雨早朝　風雨早朝

漏屋雞鳴起溼煙[一]。漏屋、雞鳴いて溼煙を起す、
蹇驢難借强朝天[二]。蹇驢、借り難く、强ひて天に朝す。
却思春水江南岸。却つて思ふ、春水江南の岸、
閒聽篷聲臥釣船[三]。閒に篷聲を聽いて釣船に臥せしを。

【字解】【一】漏屋　雨の漏る家、卽ち破屋。【二】蹇驢難借　足なへの驢馬だに借用することが出來ない。韓愈の詩に不レ見三公後、蹇驢出無レ驢とある、金史に「興定三年、官驢を以て朝士の馬なきものに借して、

これに乗ぜしむ」とある。【三】 蓬聲　苫を打つ雨の聲。

【題義】 早朝は、早く參朝すること。

【詩意】 雨もりのする破屋に雞の聲がして、溼ふ炊煙が、もうもうと立ち升つて居る。この時、足なへの驢馬を借りることも出來ず、無理に歩いて、宮城に參朝した。却つて思ふは、さきに、春水の滋へたる江南の岸邊近く泊したる釣舟の中に臥して、苫を打つ雨の聲を聞いたことで、その趣は、今でも忘れ兼ねて居る。

## 雨中曉臥、二首

雨中曉臥　二首

井桁烏啼破曙煙。井桁、烏啼いて、曙煙を破る、
輕寒薄被落花天。輕寒薄被、落花の天。
閒人晴日猶無事。閒人、晴日、猶ほ無事、
風雨今朝正合眠。風雨、今朝、正に合に眠るべし。

【題義】 説明に及ばぬ。

【詩意】 井桁の上には烏が啼いて、曙の煙を破り、折から、落花の時節、一寸寒い樣な氣がするのに、

【字解】 【一】 薄被　薄い夜具。



薄い夜具をかついで居る。われは、閒人で、晴天であつても、格別出歩く用事もなく、まして、今日風雨である上は、この儘、ゆッくり眠つて居るべきである。

【餘論】 後半二句は、閒人の拘束なきを寫し出して、自然趣がある。

香斷牀幃冷未開。香は斷えて、牀幃、冷、未だ開かず、
雨窓寥落滿檻苔。雨窓寥落、滿檻の苔。
休輕一枕江邊睡。輕んずるを休めよ、一枕、江邊に睡るを、
拋却腰金換得來。腰金を拋却して、換へ得て來らむ。

【字解】 【一】 牀幃　臥牀の上に垂れた戸ばり。【二】 滿檻　檻は窓に嵌め込んだ格子。【三】 腰金　黄金製の腰の飾。

【詩意】 香の煙も消えたのに、臥牀の上に垂れかけた紗帳は、冷かにして、未だ開かず、雨ふる窓は、寂しげにして、格子には、苔が溼うて居る。かくの如く、獨り一枕を擁して、江邊に睡つて居るのを、馬鹿にするな、これでも、官職を帶びた身で、腰下の金の飾を投げ出しさへすれば、酒でも、何でも、直に換へて來ることが出來る。

【餘論】 この詩の後半は、頽然自放の趣を寫し出して、一寸面白い。

## 久雨

水長已到折磯頭。
江天雨來殊未休。
鸕鷀鸂鶒曉爭喜。
楊柳杏花春自愁。

【題義】久雨は、數日降り續いた雨。この詩は、卽ち久雨中の風景を敍したのである。

【詩意】雨が數日降つた爲に、水嵩は非常に增加し、その勢は、斷崖の先端を折かむとする位。それでも、江天は、まだ晴れやらで、しきりに降つて居る。そこで、鵜の鳥やをしどりは、曉から騷ぎ立てて、非常に喜んで居るが、柳や杏の花は、物としはなしに愁を含み、綠は淫ひ、紅は沈んで、いかにも、懶げに見える。

## 閏三月

不須愁寫送春詩。
花比常年落最遲。

【題義】閏三月とは、普通の三月の後に、閏として、三月がもう一月あるをいふ。

【詩意】三月が畢つたからといつて、愁へつつ、春を送る詩を寫さずとも善いので、今年の花は、例年に比して、散り落つることが極めて遲い。現に、一分の春色を添へ來つて、眼前に在るので、天は、流石に心あつて、わが輩が芳時を惜むのを氣の毒に思つて、わざと、春を長くしたのであらう。

## 晚立西浦渡

鬢絲微映釣絲輕。
水葉驚風細浪生。
誰見晚涼人立處。
數株楊柳一蟬鳴。

【題義】この詩は、日暮、西浦の渡口に立ち、景色を眺めて作つたのである。

【詩意】そそけたる鬢邊の白髮は、釣絲に映じて、輕く飄り、水草の葉は、風に驚いて搖れ動き、そ

【字解】〔一〕水長　長はながしに非ず、長する、卽ち水量の增加すること。〔二〕磯頭　磯は斷崖。〔三〕鸕鷀　鵜の類。〔四〕鸂鶒　をしどり。

【字解】〔一〕芳時　春の季節。





添得一分春色在。
天應憐我惜芳時。

【題義】閏三月とは、普通の三月の後に、閏として、三月がもう一月あるをいふ。

【詩意】三月が畢つたからといつて、愁へつつ、春を送る詩を寫さずとも善いので、今年の花は、例年に比して、散り落つることが極めて遲い。現に、一分の春色を添へ來つて、眼前に在るので、天は、流石に心あつて、わが輩が芳時を惜むのを氣の毒に思つて、わざと、春を長くしたのであらう。

【字解】〔一〕鬢絲　鬢の白髮。〔二〕水葉　水草の葉。

の周圍には、自然、細浪が生ずる。誰も見るものは無いが、日暮の涼しさを受けて、我が立てる處に近く、楊柳數株生ひ茂れる間に、一つの蟬が、じじと鳴いて居る。

## 題孟浩然騎驢吟雪圖

孟浩然の驢に騎して雪を吟ずる圖に題す

西風驢背倚吟魂。　西風驢背、吟魂を倚らしむ、
只到龐公舊隱村。　只だ到る龐公舊隱の村。
何事能詩杜陵老、　何事ぞ、能詩の杜陵老、
也頻騎叩富兒門。　也た頻りに騎して富兒の門を叩く。

【字解】【一】倚吟魂　吟魂倚といふに同じ。ここでは吟魂が驢背に倚つて居るといふ義。【二】龐公舊隱村　襄陽府志に「鹿門山は、府城の東南三十里に在り、舊と蘇嶺と名づく。上に二石鹿あり、因つて、今の名に改む。漢の龐德公・唐の龐蘊・孟浩然・皮日休、ともに此に隱る」とあり、浩然の夜歸鹿門歌に人隨沙岸向江村、余亦乘舟歸鹿門、鹿門月照開煙樹、忽到龐公棲隱處とある。【三】杜陵老　杜甫。その長安に居りし時、杜陵の近くに寓居せしが故に云ふ。その詩に杜陵幸有桑麻田といひ、杜陵野客人更嗤といつて居る。【四】富兒門　杜甫の詩に朝叩富兒門、暮隨肥馬塵とある。

【題義】新唐書文藝傳に「孟浩、字は浩然、襄州襄陽の人、鹿門山に隱る、年四十、京師に游ぶ。張九齡・王維、雅に之を稱道す。維、私に邀へて內署に入る。俄にして、玄宗至る。浩然、牀下に匿る。維、實を以て對ふ。帝曰く、朕、その人を聞いて、未だ見ざるなり、何ぞ懼れて匿るるや、と。浩然に詔して、出でしむ。帝、その詩を問ふ。浩然、再拜して、自ら爲るところを誦し、不才明主棄の句に至る。帝曰く、卿、仕を求めず、而して、朕、未だ嘗て卿を棄てず、奈何ぞ我を誣ふる、と。因つて、放ち還らしむ」とある。次に、東坡の大雪青州道上の詩に又不見襄陽孟浩然、長安道上騎驢吟雪詩」とあつて、これは、浩然の集中に赴命途中逢雪と題して、

迢遞秦京道。蒼茫歲暮天。窮陰連晦朔。積雪滿山川。落雁迷沙渚。飢烏噪野田。客愁空佇立。不見有人煙。

とあるのに本づいたのであらうが、詩中に騎驢の事は見えぬ。後來、畫家は、東坡の詩に因つて、想像的に、この畫題を創設したものと思はれる。

【詩意】孟浩然は、西風の中に驢に跨り、吟魂は穩に驢背に倚り、むかし、龐德公の住める鹿門の山村に往きさへすれば善いのである。これに較べると、かの詩の上手な杜甫が、亦た驢に騎して、頻りに富貴の人の門に伺候したのは、何事か。それにつけても、浩然の高節は、まことに、慕はしいものである。

【餘論】折角、吟雪の圖に題したのに、西風驢背では、季節が合はず、畫と矛盾することに成る。これは、作者が千慮の一失であらうか。

## 江上雨中　江上雨中

江漲隨漚欲到門。　江漲、漚に隨つて門に到らむと欲す、
溼雲依樹易黃昏。　溼雲、樹に依つて、黃昏なり易し。
幽居常日無來客。　幽居、常日、來客なし、
何況瀟瀟雨滿村。　何ぞ況んや、瀟瀟、雨、村に滿つるをや。

【題義】　説明に及ばぬ。

【詩意】　漲れる大江の水は、泡と共に我が門にまで押し寄せむとし、溼雲は、木にまとひ付いて、日も暮れ易い。平常でさへ、幽居には來訪の客なき位であるから、瀟瀟として、雨が村に滿つる時などは、猶更の事である。

## 客館夜見亮師畫上有余呂二山人詩

客館、夜、亮師の畫を見る、上に余呂二山人の詩あり

上人圖畫故人詩。　上人の圖畫、故人の詩、
相見燈前夜雨時。　相見る、燈前夜雨の時。

無限雲山與煙樹。　無限の雲山と煙樹と、
總含秋色是相思。　すべて秋色を含むは是れ相思。

【題義】　亮師の本名は分からぬ。余呂は、余堯臣と呂敏との二人。いづれも、北郭の友で、前に數ば見えて居た。この詩は、夜、客館に宿した處が、亮上人の畫があり、その上には余呂二山人の詩が題してあつて、いづれも、親友である處から、感懷に堪へずして作つたのである。

【詩意】　夜雨瀟瀟たる折から、燈前に展觀したのは、余呂二友の題した亮上人の畫であつた。その畫中には、雲山と煙樹とが限りなく點出してあるが、すべて、秋色を含み、相思の念に堪へずして畫いたものの如く見えた。

## 海上逢王常宗雨夜同宿陳氏西軒

海上に王常宗に逢ひ、雨夜、同じく陳氏の西軒に宿す

故人散盡獨君存。　故人、散じ盡して、ひとり、君存す、
風雨相逢海上村。　風雨相逢ふ、海上の村。
尊酒飲闌言不盡。　尊酒、飲闌にして、言盡きず、

更留餘燭照黄昏。　更に餘燭を留めて黄昏を照らす。

【題義】王常宗、名は彝、北郭の詩友で、前に巻三、春日懐二十友一の詩中にも見えて居た。この詩は、何處か知らぬが、海邊の地に於て、その人に遇ひ、雨夜、一處に陳氏西軒に泊まつて作つたのである。

【詩意】舊友は、皆いづれかに散じて仕舞ひ、君だけが殘つて居て、今日、風雨の中、ここ海上の村に於て、偶然邂逅した。ともに尊酒に對して、飲むことは畢りかかつたが、話は容易に盡きず。そこで、燈火を掲げて黄昏を照らし、依然として、話し續けて居る。

## 過北莊訪友　北莊を過ぎて友を訪ふ

淺水平沙凍鴨眠。　淺水平沙、凍鴨眠る、
秋聲吹過石橋邊。　秋聲、吹き過ぐ石橋の邊。
尋君兼得尋詩興。　君を尋ねて、兼ねて詩を尋ぬるの興を得たり、
野樹江雲欲雪天。　野樹江雲、雪ふらむと欲するの天。

【題義】北莊は、多分、北郭で、卽ち青邱が初めに居つた蘇州城北の田舍であらう。この詩は、その地を過ぎ、友人を訪問して作つたのである。



【詩意】野川の水は淺くして、平沙滿目、そこに寒げなる家鴨は、眠つて居るし、秋聲は、颯颯として、石橋の邊を吹き過ぎる。君を尋ねる途すがら、兼ねて、詩を尋ねる興を得たのは面白く、折から、野樹は江雲を帶びて、天色晦冥、今にも雪の降りさうな景色である。

【餘論】起結二句の敍景は、如何にも寒さうで、嚴冬の候と見えるのに、承句に秋聲とあるは、如何したことか、一寸受け取れぬ。

## 題畫　畫に題す

落日青山影在沙。　落日青山、影、沙に在り、
鏡湖波淨遍荷花。　鏡湖波淨くして、荷花遍し。
雲間樹底參差屋。　雲間樹底、參差の屋、
借問誰家是賀家。　借問す、誰が家か是れ賀家。

【字解】【一】在沙　沙は汀岸。【二】鏡湖　前に數ぐ見ゆ。今の浙江省紹興縣南に在つて、一名鏡湖、又の名は長湖。唐の玄宗が祕書監賀知章に此湖の一曲を賜ひしに因り、又の名を賀監湖ともいふ。【三】參差　高低一ならざる貌。【四】賀家　賀知章の家。

【題義】説明に及ばぬ。

【詩意】夕日かがやく青山の影は、汀岸の上に映り、鏡湖は波淸くして、蓮の花が一ぱいである。雲

間樹底には、高低一ならざる民家が、いくらも散點して居るが、その中のどれが、賀知章の家であらうか。

## 得故人書、知未入京、因寄

故人の書を得て、未だ京に入らざるを知り、因つて寄す

曾約春深到鳳臺。　かつて約す、春深くして、鳳臺に到るを、
君今不到只書來。　君、今到らず、只だ書來る。
滿緘離恨牀頭放。　滿緘の離恨、牀頭に放ち、
一度相思一展開。　一度の相思、一展開。

【題義】説明に及ばぬ。

【詩意】さきに、春の深き頃、上京するとのことであつたが、君は、今、なほ來らず、そして、手紙だけが屆いた。一封の書中に別離の恨を書き立ててあるが、その儘、牀頭に差し置き、一たび君を懷かしく思つた其時ごとに、繰り廣げて、拜見しやうと思つて居る。

【字解】【一】鳳臺　宮城を云ふ。
【二】滿緘　一封の書といふに同じ。
【三】牀頭放　放ほさし置く。

## 題王翰林所藏畫蘭

王翰林藏するところの畫蘭に題す

春到懷王舊渚宮。　春は到る懷王の舊渚宮、
沙棠舟去水煙空。　沙棠、舟去つて水煙空し。
孤叢不有幽香發。　孤叢、幽香の發するあらざれば、
應沒江邊百草中。　應に沒すべし江邊百草の中。

【字解】【一】懷王舊渚宮　章華宮を云ふ、今の宜昌附近の江邊に在る。【二】沙棠舟去　沙棠は香木の名、山海經に「崑崙の沙棠木、その葉を食へば溺れず、舟を爲れば沈まず」とあり、李白の詩に水圓之樞沙棠舟、玉簫金管坐二兩頭一とある。

【題義】説明に及ばぬ。王翰林の名字は不詳。

【詩意】春は、章華宮に滿ち、蘭の花も咲き出たが、かの屈原は、一去して返らず、さながら、沙棠の香木で造つた舟が、忽ち去つて、水煙空しく、絕えて見るところなきが如くである。抑も、蘭は、屈原の愛でて佩としたものであるが、これが叢をなすとも、幽香を發しなければ、江邊に生ひ茂る百草の中に沒して、人にも知られぬであらう。それと同じく、屈原は、忠貞の節を懷いて居た爲に、たとひ、その死を得ずとも、天晴、千古に傳はつて居る次第である。

## 不見花　花を見ず

看花無計作閒身。　花を看て、閒身と作るに計なし、
塵土餘杭暗度春。　塵土餘杭、暗に春を度る。
不見花開莫惆悵。　花の開くを見ざるも、惆悵する莫れ、
花飛還得免愁人。　花飛んで、還た人を愁へしむるを免るるを得たり。

【題義】説明に及ばぬ。

【詩意】閒な身となつて、十分に花を見たいと思ふが、どうも、さういふ樣にも成り兼ね、餘杭の客舍に滯留し、塵土の中に、それとも知らず春を過ごした。この地には、全く花が無いからとて、惆悵するにも及ばず、花の散る時節に成つても、人を愁へしむることを免れ得たるは、却つて、好都合である。

【字解】【一】餘杭　越絶書に、「秦の餘杭山は、越王、吳王を樓ましむるの山なり」とある。



## 錦帆涇　錦帆涇

水繞荒城柳半枯。　水は荒城を繞つて、柳、半ば枯れ、
錦帆去後故宮蕪。　錦帆去る後、故宮蕪す。

【字解】【一】故宮蕪　蕪は荒蕪となる、草むらとなる。
【二】一幅蒲　蒲を織つて造つた帆、即ち蒲帆。

窮奢畢竟輸漁父。　奢を窮めて、畢竟、漁父に輸す、
長保秋風一幅蒲。　長く保つ秋風一幅の蒲。

【題義】姑蘇志に「錦帆涇は、即ち蒼子城の濠なり。世に傳ふ、吳王、かつて錦帆を作つて、以て游ぶ、故に名づく。大街の西、貫樂橋南に在り、北市より直に報恩寺に抵る」とある。

【詩意】涇水は荒城を繞つて流れ、汀頭の柳は半ば枯れ、吳王の錦帆、すでに去りし後、故宮は草むらと成り果てて仕舞つた。奢侈を窮めた處で、到底永くは續かず、かの漁父が、秋風の中に、いつまでも、一幅の蒲帆を保つて居るのに及ばぬ、まことに、歎息の至である。

## 楓橋　楓橋

畫橋三百映江城。　畫橋三百、江城に映ず、
詩裏楓橋獨有名。　詩裏の楓橋、獨り名あり。
幾度經過憶張繼。　幾たびか經過して張繼を憶ふ、
烏啼月落又鐘聲。　烏啼き、月落ちて、又鐘聲。

【題義】題下の原注に「閶門の西七里に在り、唐の張繼題詩の處なり」とある。前にも數ば見えたが、

【字解】【一】畫橋三百　白居易の詩に紅欄三百九十橋とある。

寒山寺の附近で、張繼の題詩は、卽ち月落烏啼の一首である。

【詩意】蘇州には、盡橋が三百もあつて、江城に映じて居るが、楓橋のみは、詩に入つて、ひとり其名を擅にして居る。予も幾たびか其地を經過し、かの張繼が月落ち烏啼き、そして鐘聲を聞いたといふ當日の詩を、毎毎憶ひ出す次第である。

## 烏鵲橋

烏鵲南飛月自明。
恨通銀漢水盈盈。
夜來橋上吳娃過。
只道天邊織女行。

【語義】姑蘇志に「橋は長洲縣東に在り、古しへ、烏鵲館あり、因つて名づく」とあり、白居易の詩に烏鵲橋紅帶二夕陽一とある。

【詩意】橋の名にしおふ烏鵲は、南へ飛んで、月色自ら明かに、おもふ郎に逢はぬ恨は、天の河に通じて、水の盈盈たるが如く、はてしもない。夜來、橋の上を吳地の少女が通つて、人待ち顏にうろうろして居るのは、丁度、織女が天上を行いて牽牛を待つて居ると同じ樣である。

【字解】【一】烏鵲南飛　曹操の短歌行の中の句を用ふ。【二】銀漢　卽ち銀河。【三】盈盈　漢の古詩に盈盈一水間、脈脈不レ得レ語とある。【四】吳娃　娃は南方の土語で、少女といふ義。

## 兩妓

李娟張態兩嬌姿。
傳得香名在白詩。
當日尊前漫歌舞。
使君家自有楊枝。

【語義】題下の原注に「李娟張態は、樂天、吳に守たりし時の名妓なり」とある。樂天は居易の字、かつて蘇州刺史と成つたことがある。

【詩意】李娟張態といふ兩妓は、その名に負かず、姿なまめかしく、白樂天の詩に入つた爲に、芳名を千古に傳へて居る。さはれ、當日、尊前に於て、臆面なくも漫に歌舞を爲したので、樂天の家には、楊枝と稱する色藝雙絕の小妾が居たのである。

【字解】【一】白詩　白居易の詩。【二】使君　前に數ば見ゆ、官職あるもの、殊に太守の尊稱。【三】楊枝　白居易の小妾、本名は小蠻、白集中に楊枝を題遣した詩がある。

## 短簿祠　短簿の祠

下馬空林問廟扉。　馬を下つて空林、廟扉を問ふ、
衣冠寂寞掩塵幃。　衣冠寂寞として、塵幃を掩ふ。
不能復使桓公怒。　復た桓公をして怒らしむる能はず、
莫怪年年祭客稀。　怪む莫れ、年年祭客稀なるを。

【題義】虎邱志に「東山廟は、虎邱山門内、東嶺の上に在り、晉の司徒王珣を祀り、短簿祠と名づく。珣、はじめ、桓溫の主簿となり、東亭侯に封ぜらる。又、西山廟を西に建て、珣の弟司空珉を祀る。珣珉兄弟、宅を舍てて寺となす、故に寺中、廟を立てて、これを祀る、今、居民祀つて土神となす」とある。

【詩意】馬を下りし後、空林の中なる破廟の扉を敲いて這入ると、王珣の像があるが、衣冠寂寞として、ほこりのかかつた戸ばりに掩はれて居る。千年後の今日、さしもの王珣も、かくの如く像となつて仕舞へば、最早、桓溫を怒らしめることも出來ず、折角ながら、世に忘れられ、年年お參りする人の稀なるも、尤もな次第である。

【字解】【一】塵幃　ほこりのかかつた幃。【二】桓公怒　世説に、「王珣、郗超、並に奇才あり、大司馬桓溫に養拔せられ、珣は主簿となり、超は記室參軍となる。超、人となり、鄙多く、珣は狀短小、時に、





## 聞王翰林使蕃　王翰林の蕃に使するを聞く

碎葉城邊積雪明。　碎葉城邊、積雪明かに、
彈箏峽水遠人行。　彈箏峽水、遠人行く。
已聞贊普知臣順。　すでに聞く、贊普が臣順を知るを、
不似前朝作舅甥。　似ず前朝舅甥となるに。

【題義】王翰林、名字閲歴ともに不詳。蕃は吐蕃の略、即ち後の西藏。

【詩意】路すがら地勢高峻、碎葉城邊の積雪明かに、彈箏峽の水聲囂しき處を君は通行せられ、その艱苦は、お察し申す位。しかし、承はれば、その地の君長も、臣下として、我が朝に恭順なるを旨とし、唐代、舅甥の禮を執つて相下らざりしに似もやらず、今日、餘程扱ひ易くなつたのは、まことに幸なことである。

【字解】【一】碎葉城　舊唐書地理志に「貞觀十八年、焉耆を滅して碎葉城を置く」とある。【二】贊普　舊唐書吐蕃傳に「その俗、彊雄を謂うて贊となし、丈夫を普といふ、故に君長を號して贊普といふ」とある。【三】前朝　唐を指す。【四】舅甥　吐蕃傳に「貞觀十五年、太宗、文成公主を以て之に妻はし、禮部尚書江夏郡王道宗をして婚を主らしめ、節を持して、公主を吐蕃に送る。弄贊、親ら河源に迎へ、道宗を見、子壻の禮を執つて甚だ恭し。中宗の神龍元年、婚を乞ふ。中宗、愛ふところの雍王宗禮の女を以て金城公主となし、これに嫁するを許す。開元十八年、吐蕃、和を請うて入貢し、表して、外甥と稱し、烏帝を舅といふ」とある。

309
65

終